

長岡京左京三条四坊九町跡 発掘調査報告書

2 0 2 5

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市伏見区久我西出町7番4・5・6・7で実施した、長岡京左京三条四坊九町跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 23NG434)
- 2 当調査は、物流倉庫建設に伴う発掘調査である。長岡京左京第714次調査として実施した。
- 3 現地調査は、阪急阪神不動産株式会社より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、望月麻佑（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和6年6月4日～9月27日である。
- 5 調査面積は852.5㎡である。
- 6 本文・図中で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「久我」「久世」を参考にし、作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系平面直角座標系Ⅵによる。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 遺構番号は通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、掘立柱建物は別に番号を付した。
- 10 本書の執筆は望月が行い、編集は望月、興梠千春（文化財サービス）が行った。
- 11 現地での記録写真撮影は望月が行い、出土遺物の撮影は写真房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 12 現地での重機掘削は、株式会社一誠建設に依頼した。
- 13 調査に係る資機材のリースおよび仮設工事は株式会社 Soid に依頼した。
- 14 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 15 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 田中慎一、上田智也、清須慶太、小林一浩、吉岡創平（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 興梠千春、多賀摩耶、中 優作、場勝由紀葉、甲田春奈、北澤鈴子、下市紗耶香、内牧明彦（以上、文化財サービス）
- 16 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 17 出土遺物の年代観は、下記の文献に依った。

木村泰彦・小田桐淳「考古 七 長岡京時代」『長岡京市史 資料編 一』
長岡京市史編さん委員会 1991 年

平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所 2019 年

日本中世土器研究会『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022 年
- 18 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。

（敬称略）

中久保辰夫（京都橘大学）

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	7

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	11
2 検出遺構	11
(1) 第1－1面	16
(2) 第1－2面	18
3 出土遺物	25
(1) 第1－2面	25
(2) 第1－1面	26
(3) 中世耕作土・重機掘削	28

第Ⅳ章 まとめ

1 長岡京期における左京三条四坊九町周辺の土地利用について	29
2 中世以降の条里について	32

附章 長岡京左京三条四坊九町跡出土炭化物の分析	38
-------------------------	----

図版目次

- | | | |
|-------|----|--|
| 図版 1 | 遺構 | 1. 遺構完掘後 調査区全景 垂直写真（上が北）
2. 調査地遠景（調査地上空より北東方 西山連峰を臨む） |
| 図版 2 | 遺構 | 1. 西区 中世遺構完掘後（南から）
2. 西区 中世遺構完掘後 垂直写真（上が北） |
| 図版 3 | 遺構 | 1. 東区 中世遺構完掘後（北から）
2. 東区 中世遺構完掘後 垂直写真（上が東） |
| 図版 4 | 遺構 | 1. 西区 土坑004・005 完掘状況（北から）
2. 西区 土坑004 東西断面（北から）
3. 西区 土坑005 南北断面（東から） |
| 図版 5 | 遺構 | 1. 東区 土坑052 検出状況（北から）
2. 東区 土坑052 東西断面（北から） |
| 図版 6 | 遺構 | 1. 西区 長岡京期遺構完掘後（南から）
2. 西区 長岡京期遺構完掘後 垂直写真（上が北） |
| 図版 7 | 遺構 | 1. 東区 長岡京期遺構完掘後（北から）
2. 東区 長岡京期遺構完掘後 垂直写真（上が東） |
| 図版 8 | 遺構 | 1. 西区 建物1 柱穴検出状況 垂直写真（上が北）
2. 西区 柱穴028 東西断面（北から）
3. 西区 柱穴029 東西断面（北から）
4. 西区 柱穴032 東西断面（北から） |
| 図版 9 | 遺構 | 1. 西区 建物2 柱穴検出状況 垂直写真（上が北）
2. 西区 柱穴030 南北断面（西から）
3. 西区 柱穴031 東西断面（南から）
4. 西区 柱穴033 東西断面（南から）
5. 西区 柱穴035 東西断面（南から） |
| 図版 10 | 遺構 | 1. 東区 井戸051 井戸枠内掘削後（北から）
2. 東区 井戸051西半 井戸掘方断割後（西から） |
| 図版 11 | 遺物 | 1. 井戸051 出土遺物1（土器）
2. 井戸051 出土遺物2（土器・土製品・瓦） |
| 図版 12 | 遺物 | 1. 素掘り溝群 出土遺物
2. 土坑004、重機掘削、中世耕作土 出土遺物 |
| 図版 13 | 遺物 | 1. 井戸051 出土遺物3（斎串）
2. 井戸051 出土遺物4（曲物底板）
3. 重機掘削 出土遺物2（銭貨） |

挿図目次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査経過写真	2
図3	調査区割・基準点配置図（1：250）	4
図4	長岡京条坊図（1：80,000）	5
図5	京都盆地付近の地形分類図（1：250,000）	5
図6	既往調査位置図（1：5,000）	7
図7	調査区北壁断面図（1：60）	12
図8	調査区東壁断面図・南壁断面図1（1：60）	13
図9	調査区南壁断面図2（1：60）	14
図10	第1－1面調査区全体平面図（1：250）	15
図11	西区 土坑004・005平断面図（1：60）	17
図12	東区 土坑052平断面図（1：40）	18
図13	第1－2面調査区全体平面図（1：250）	19
図14	西区 建物1平断面図（1：60）	20
図15	西区 建物2平断面図（1：60）	22
図16	東区 井戸051平断立面図（1：40）	23
図17	西区 炭化物分布地点060・061平断面図（1：50）	24
図18	出土遺物1（1：4、1：8）	27
図19	出土遺物2（1：2、1：4）	28
図20	長岡京左京三坊四坊周辺の調査（1：2,000）	30
図21	久我里比定地と近世字境・長岡京条坊（1：3,000）	33

表目次

表1	既往調査一覧表	9
表2	遺構概要表	16
表3	遺物概要表	25
表4	調査地周辺長岡京期遺構一覧表	35
表5	遺物観察表	37

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

本調査は物流倉庫建設工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は京都市伏見区久我西出町7番4・5・6・7に所在し、長岡京左京三条四坊九町跡に該当する。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が行われた。その結果、遺構の存在が確認されたことから、開発原因者である阪急阪神不動産株式会社に対し発掘調査の指導が行われた。調査は、開発原因者から文化財サービスが委託を受けて実施することになった。

2 調査の経過（図2）

発掘調査は、2024年6月4日から現地作業を行った。調査区は、文化財保護課の指導により、東西42.0m、東辺南北36.0m、西辺南北17.0m、面積847.0㎡を設定した。調査区は東区と西区に二分割し、西区より調査に着手した。

6月4日より準備工を行い、6月7日より西区の重機掘削を開始した。現代盛土及び中世から現代までの耕作土を重機掘削で除去したところ、基盤層である灰白色～黄褐色粘質土層を検出した。その後人力によって遺構成立面である基盤層上面の精査を行い、中世に属する多数の南北素掘り溝群と長岡京期の柱穴群を確認した。同一面での検出ではあるが、中世の遺構群を第1-1面、長岡京期の遺構群を第1-2面と設定し、二段階に分けて遺構掘削、写真撮影や測量作業などの記録作業を行った。写真撮影の機材は、35mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。7月25日に西区調査を終了し、8月2日より東区調査に着手した。西

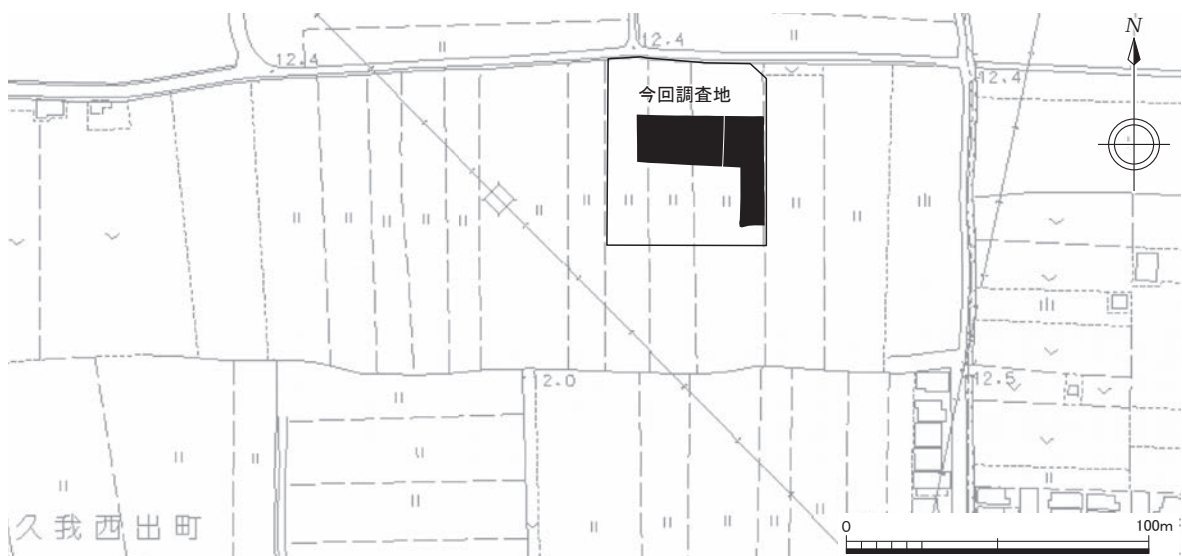


図1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査区設定（北東から）



2. 西区重機掘削作業・中世遺構検出作業（北西から）



3. 西区柱穴035掘削作業（北から）



4. 東区重機掘削作業（北から）



5. 東区中世素掘り溝掘削作業（北西から）



6. 東区井戸051掘削作業（北東から）



7. 調査区内埋戻し作業（北東から）



8. 調査完了後（北東から）

図2 調査経過写真

区同様に基盤層上面まで重機掘削を行い、人力によって遺構成立面の精査を行った結果、中世の素掘り溝群と長岡京期の井戸を確認した。西区と同じく中世の遺構群を第1－1面、長岡京期の遺構群を第1－2面と設定し、二段階に分けて遺構掘削及び写真撮影や測量作業などの記録作業を実施した後、補足調査として井戸の断割作業や基盤層上面で検出された炭化物分布地点の断割作業、調査区南西隅の拡張作業を行った。9月20日より埋戻し作業を開始し、9月27日に全ての工程を完了した。調査区拡張に伴い、最終的な調査面積は852.5㎡となった。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査及び指導を受けた。また、文化財保護課が指定した本調査の検証審査員である中久保辰夫氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にM. 1、M. 2、M. 3を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

M. 1	X = -117,490.685 m	Y = -25,198.329 m	H = 11.906 m
M. 2	X = -117,491.814 m	Y = -25,158.228 m	H = 11.934 m
M. 3	X = -117,529.636 m	Y = -25,158.171 m	H = 11.955 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した望月、編集作業は興梠が担当し、その他の整理作業は当社社員が分担して行った。

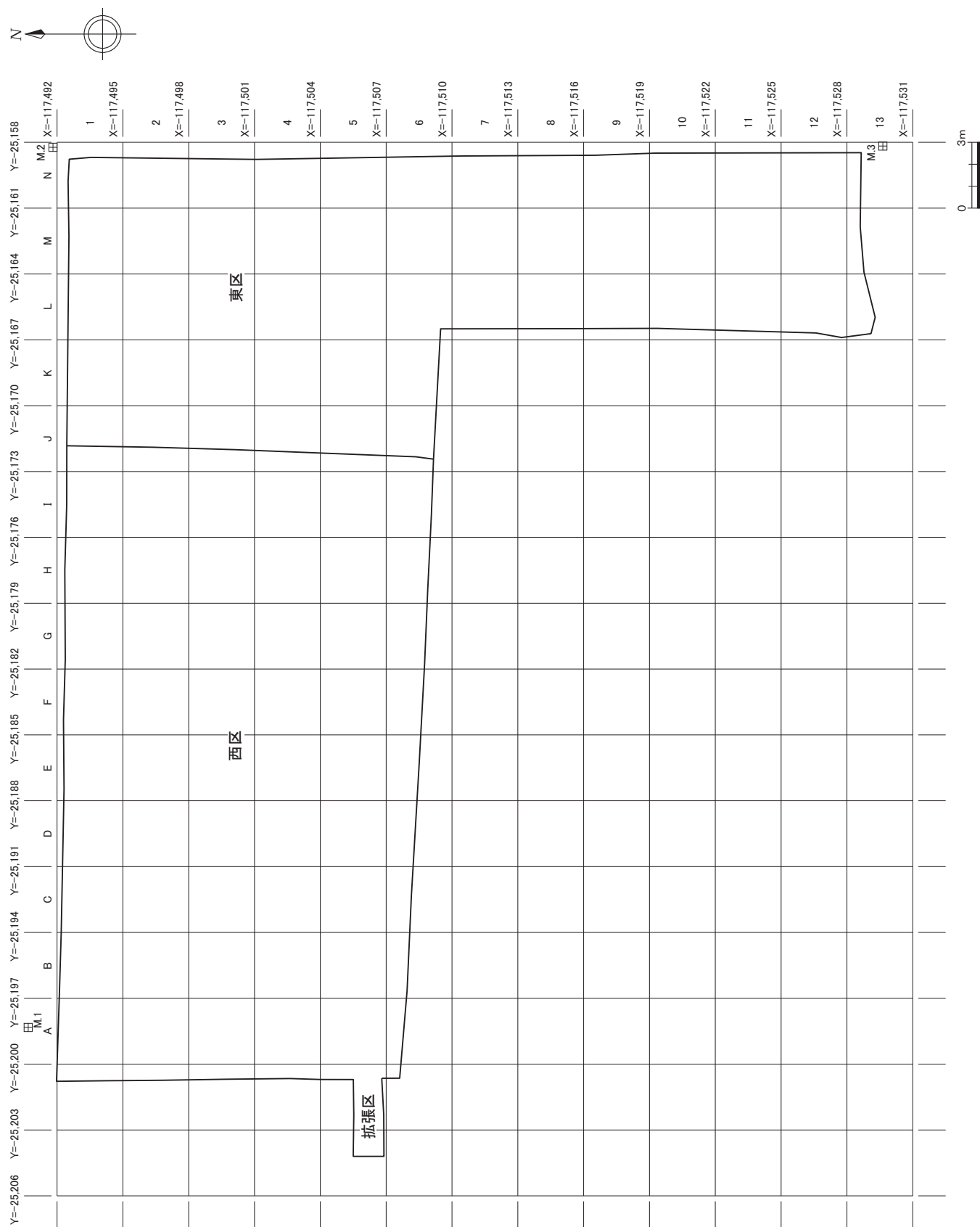


図3 調査区割・基準点配置図（1：250）

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境（図4・5）

調査地は京都盆地南西部の乙訓地域に位置する。当地域には縄文時代から長岡京期を中心として多くの遺跡が所在しており、調査地の北西には弥生時代に属する東土川遺跡と鶏冠井遺跡、調査地の南西には縄文時代から古墳時代の複合遺跡である鶏冠井清水遺跡が分布する。当地一帯は水田として古くから利用されてきたが、近年は工業地としての開発が急速に進んでいる。

乙訓地域は、西が丹波地帯の古生層群を基盤とする西山山地、東が桂川に画された地形を呈する。西山山地の麓には大阪層群よりなる向日丘陵及び大原野台地が張り出し、これらの前面に河岸段丘と扇状地が展開する。当地域の東半分を占める低地は桂川によって形成された氾濫原が広がり、その中に自然堤防が点在している。調査地は氾濫平野上に立地し、桂川から約1.2km西、標高11.9mの地点に位置する。

乙訓地域には延暦三（784）年に桓武天皇によって平城京から遷都された長岡京が存在する。調査地は京内の北東部にあたる左京三条四坊九町の宅地部分に該当し、当地より約30m北には二条大路南側溝が推定されている。長岡京はわずか10年の間で廃都となり平安京へと移ることから、宮都としてどこまで整備されていたか疑問視されていたが、近年の発掘調査により造営がかなり進んでいたことが判明している。

長岡宮に隣接する左京北一・一・二・三条周辺は諸司厨町や離宮が分布するエリアである。当地周辺の発掘調査においても、左京二条三坊十五町・三条三坊十六町・三条四坊六町にて大型の庇付建物群が検出されている。三条三坊十六町では南北両庇付建物（正殿）の東側に建物（脇殿）が並

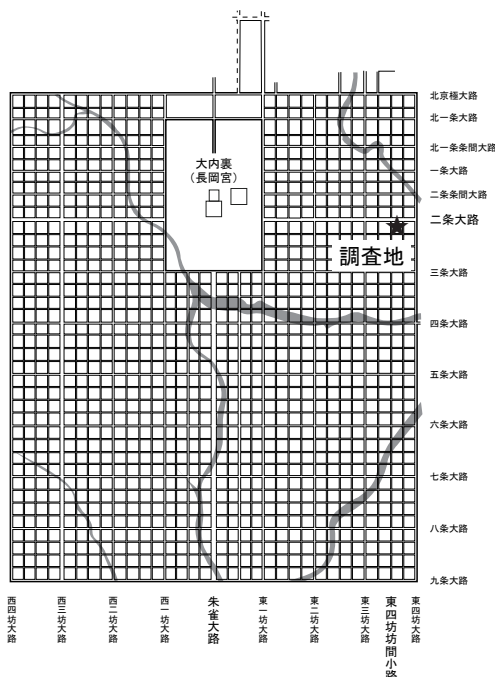


図4 長岡京条坊図（1：80,000）
（家原圭太『古代都城宅地の研究』2023年
を参考に作成）

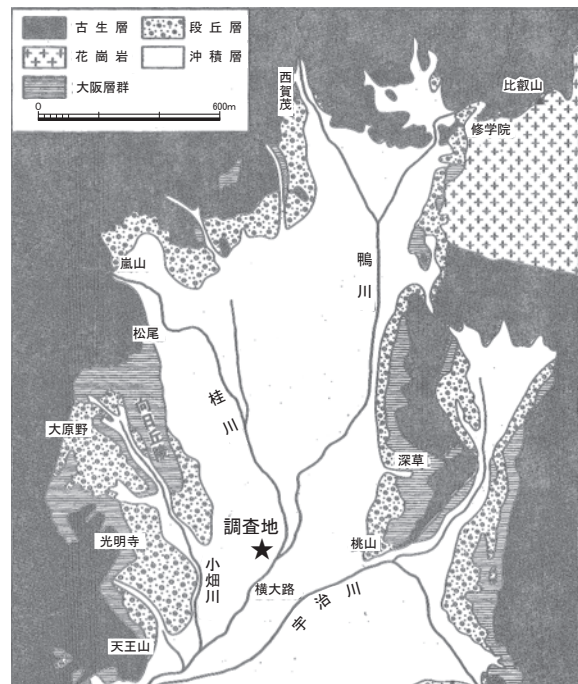


図5 京都盆地付近の地形分類図（1：250,000）
（『向日市史』上巻より転載・一部加工）

ぶ「コ」字型配列の建物配置が認められた。また、三条四坊六町では南北両庇付建物（正殿）の北側に建物（後殿）が並んだ状態で確認された。これらは官衙の中核施設にて採用される様式であり、調査地一帯は高級官吏が居住する邸宅地であったことが窺える。

廃都後、平安時代から京内に造営された邸宅に対して、京外では離宮や別業が数多く造営されるようになる。当地より約900m北東には、平安時代後期に村上源氏の嫡流である源顕房が構えた別荘（別業）「久我（古河）水閣」⁽¹⁾が所在する。発掘調査は行われておらず実態は不明であるものの、『久我家文書』のうち中世に作成された「久我本荘検注帳」や江戸時代中期に成立した久我村に関する地誌『老諺集』などの史料にて、「南殿」「政所」「池尻」といった記載が見られることから、御殿や政治機関、苑池などを備えた別邸であったことが窺える。顕房の息子である源雅実が別業を受け継ぎ、「久我水閣」に因んで久我太政大臣と号した。これが「久我」の家名の由来である。鎌倉時代初頭、当地一帯は源（久我）通親の家領として、「久我荘」と名字荘園になった。当地の条里は久我里2坪に比定される。久我荘は中世を通じて守護や在地国人などの侵害を受けながら久我家の経済基盤を支え続けたものの、江戸時代初頭には知行没収となり、以後多くの領主によって小規模な所領に分割領有されるようになる。調査地の約900m南東には、鎌倉時代後半から室町時代の環濠集落跡である久我東町遺跡が位置する。濠の幅は約6m、深さ1.5m以上の規模で、環濠の内部には整然と配置された建物や、井戸、区画溝、墓などが確認された。当遺跡は西国街道と平安京を結ぶ古道である久我綴が西に面しており、交通の要衝であったことが窺える。

註

- (1) 「上皇右大臣古河水閣に遊覧」『中右記』応徳四（1087）年二月十日条
「齋宮右大臣久我水閣へ遷御」『中右記』寛治六（1092）年六月二九日条
「上皇内大臣久我水閣へ方違」『中右記』天仁元（1108）年三月十八日条

参考文献

- 家原圭太『古代都城宅地の研究』雄山閣 2023年
下中邦彦『京都市の地名』日本歴史地名体系第二七巻 平凡社 1979年
長宗繁一・鈴木廣司「久我東町遺跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
長宗繁一「久我殿」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第2号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
野島 永・中川和哉・小池 寛・岩松 保・平良泰久『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第28冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
日下雅義「第一章第一節 自然環境」『向日市史』上巻 向日市史編さん委員会 1983年

2 既往の調査（図6、表1）

調査地周辺は田園地帯であったが、近年より工場地・宅地としての開発が進み、それに伴って発掘調査の件数も増加している。

名神高速道路関連の発掘調査としては、1・4が挙げられる。1は北方のトレンチが12ブロック13トレンチ、南方のトレンチが11ブロック22トレンチである。12ブロック13トレンチでは、長岡京期に属する東西棟の掘立柱建物1棟、方形縦板組隅柱横棧留型の井戸、二条条間南小路南北側溝・東三坊坊間東小路東西側溝、南北方向の柵列が検出された。11ブロック22トレンチでは、二条大路北側溝が確認されている。4はD-2A区のみ掲載した。長岡京期に属する南北棟の掘立柱建物1棟、東西棟2棟が検出されている。また、地図外ではあるが、1の北東側にて行われた名神高速桂川パーキングエリア建設に伴う調査では、長岡京期の条坊関連遺構の他、道路側溝・門跡・築地遺構・掘立柱建物・井戸など宅地関連遺構が多数検出されている。特に二条三坊十五町にあたる

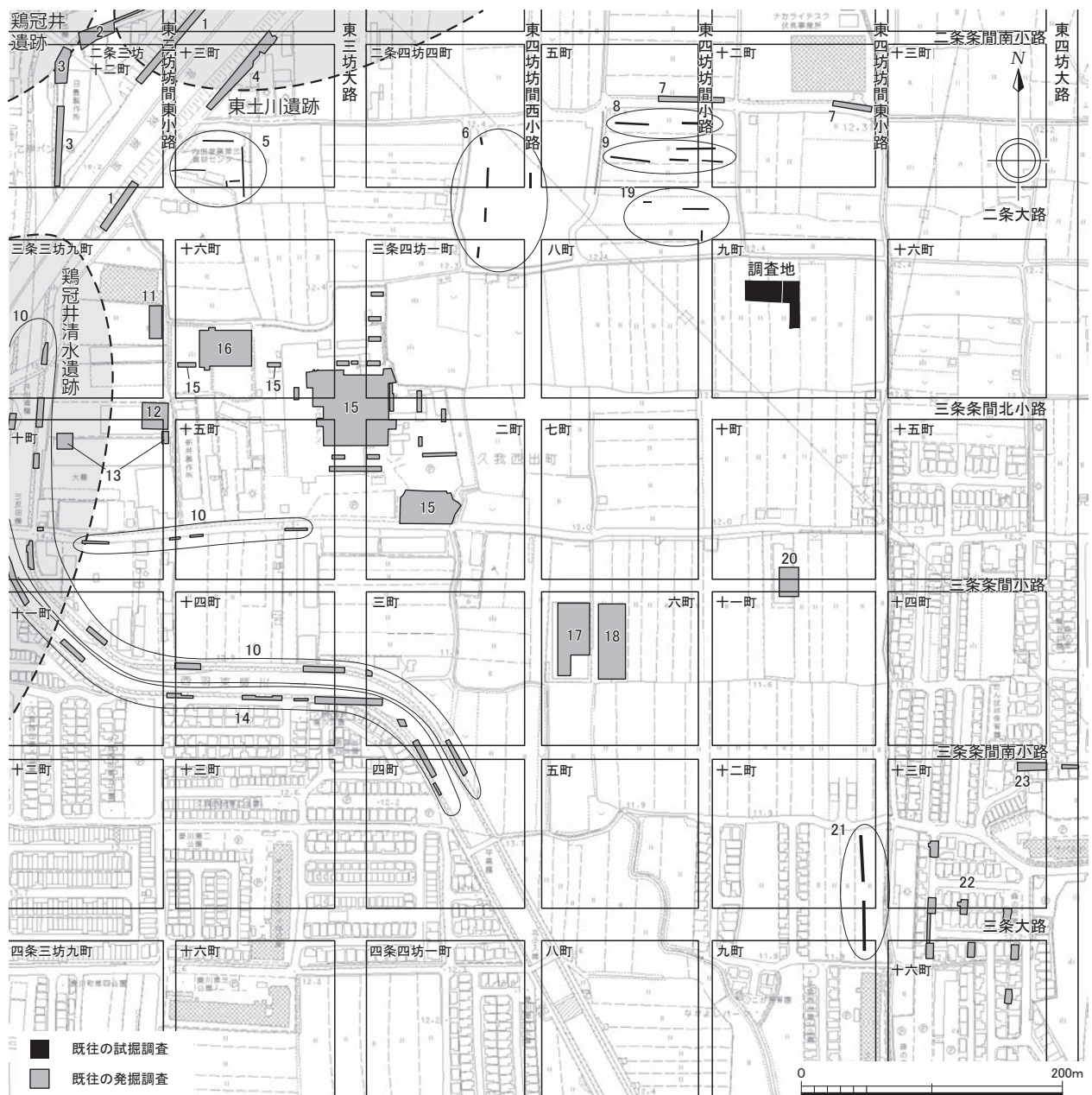


図6 既往調査位置図（1：5,000）

エリアでは、「コ」字型に配される庇付建物群、醸造施設や厨とみられる建物、横板井籠組の井戸などが見つかっていることから、官衙町としての性格を持っていたことが窺える。その他、弥生時代中期の方形周溝墓や水田関連遺構も多数確認されている。

西羽東師川の河川改修工事に伴う発掘調査として、2・3・10・14が挙げられる。2では長岡京期の溝、10では東三坊大路西側溝・二条条間小路南北側溝・三条条間南小路南側溝が確認された他、縄文時代晩期の土坑や弥生時代から古墳時代の流路なども見つかっている。14では長岡京期の東西棟の掘立柱建物1棟、三条条間南小路南北側溝・東三坊大路東西側溝・東三坊坊間東小路東側溝が検出された。

15・16は京阪セロファン工場建設に伴う発掘調査である。15では長岡京期に属する南北棟の掘立柱建物・柵列・区画溝・井戸・東三坊大路東西側溝の他、縄文時代後晩期から弥生時代の湿地状遺構が認められている。16では長岡京期の掘立柱建物3棟と弥生時代から長岡京期の流路が検出されている。建物群は東西棟の正殿と南北棟の脇殿で構成され、「コ」字型の建物配置となる。流路はこれらの建物群の間を走り、長岡京期においては宅地内の用水路として用いられたものと想定される。弥生時代では柵施設を伴っており、農業用の排水路であったことが窺える。

11・12・13の発掘調査では、東三坊坊間東小路西側溝が検出されている。12では、東三坊坊間東小路西側溝と三条条間北小路南側溝の交差部が見つかっており、西側溝は三条条間北小路を貫いて南流するが、南側溝は西側溝に行き止まり、東三坊坊間東小路を貫通していない状態で確認された。交差部付近では土馬や祭祀用土師器鉢が出土していることから、穢れを流す交差部の水辺の祭祀跡の可能性がある。13においても、東三坊坊間東小路西側溝より和同開珎とヒノキ製人形が出土している。

7は工場建設に伴う道路新設のための発掘調査で、長岡京期の東四坊坊間小路東側溝や古墳時代の流路などが検出されている。8・9の試掘調査においても、東四坊坊間小路東西側溝と想定される溝が確認されている。

17・18はメカテック工場建設に伴う発掘調査である。長岡京期に属する掘立柱建物7棟、柱列2条、方形井戸の他、下層には縄文時代晩期から弥生時代の流路などが認められている。17の調査区では、正殿・後殿とみられる東西棟の庇付建物が2棟検出され、その周囲に倉庫などの雑舎とみられる付属建物が5棟確認された。18の調査区で検出された井戸は木枠組み一辺1.35mを測る大型の井戸で、底部の土居桁のみ確認された。また、調査区の東半では湿地状堆積が広がっており、長岡京造営後も湿地の状態であったことが窺える。

19は調査地北西側にて行われた試掘調査である。二条大路南側溝の推定位置に東西溝が認められたが、瓦器片を含むことから中世の耕作溝である可能性が高い。

20は協和精工工場建設に伴う発掘調査で、長岡京期に属する東西棟の掘立柱建物1棟、三条条間小路南北側溝が確認されている。

22・23は調査地南東側の宅地開発に伴う発掘調査である。22では、長岡京期に属する東西棟の掘立柱建物1棟、井戸2基、柵列2条、三条大路南北側溝が認められている。井戸はいずれも方形縦板組隅柱横棧留型の井戸である。古墳時代の溝も5条検出されており、いずれも北で西に振れている。

表 1 既往調査一覧表

	調査位置 (左京を省略)	調査法	調査回数	調査成果概要	掲載文献
1	二条三坊十二・十四町、 一条条間南小路、 東三坊坊間東小路、 二条大路、東土川遺跡	発掘	L267	長岡京期の二条条間大路北側溝・東三坊坊間小路東西側溝・二条条間南小路南北側溝・建物跡・柵列・溝・井戸を検出。	「(1) 長岡京跡左京第 241・267・268 次」『京都府遺跡調査概報 第 51 冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 年
2	二条三坊十一町、 一条条間南小路、 鶏冠井遺跡	発掘	L165	縄文時代後期の湿地状堆積、長岡京期の溝、鎌倉時代の溝・土坑を検出。	「23 長岡京左京南一条三坊・二条三坊」『昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1989 年
3	二条三坊十二町、 一条条間南小路、 鶏冠井遺跡	発掘	L139	中世の耕作溝を検出。	「33 長岡京左京一条三坊・二条三坊」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988 年
4	二条三坊十三・十四町、 一条条間南小路、 東土川遺跡	発掘	L314	長岡京期の建物跡・土坑・流路、中世の耕作溝を検出。	「(2) 長岡京跡左京第 303・314・315 次」『京都府遺跡調査概報 第 61 冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 年
5	二条三坊十三町、 二条大路、 東三坊坊間東小路	試掘	-	長岡京期の二条大路北側溝・柱穴・ピット、中世の耕作溝、時期不明の溝を検出。	「Ⅲ -13 長岡京左京二条三坊十三町跡 No.96」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 22 年度』文化市民局 2011 年
6	二条四坊四町、 三条四坊一町、 東四坊坊間西小路、 二条大路	試掘	-	長岡京期の東四坊坊間西小路東側溝・二条条間南小路北側溝、時期不明の落込み・溝・ピットを検出。	「Ⅴ -8 長岡京左京二条四坊・三条四坊跡 No.85」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 21 年度』文化市民局 2010 年
7	二条四坊五・十二町、 東四坊坊間小路、 東四坊坊間東小路	発掘	L572	古墳時代の流路・溝・土坑、長岡京期の東四坊坊間小路東側溝・溝・柱穴、平安時代～中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京二条四坊五・十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-5 埋文研 2014 年
8	二条四坊五・十二町、 東四坊坊間小路	試掘	-	長岡京期の東四坊坊間小路東西側溝を検出。	「Ⅵ 試掘調査一覧表：No.118」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和 2 年度』文化市民局 2021 年 ※
9	二条四坊五・十二町、 東四坊坊間小路、 東四坊坊間東小路	試掘	-	長岡京期の東四坊坊間小路東側溝を検出。	「Ⅵ 試掘調査一覧表：No.117」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和 2 年度』文化市民局 2021 年 ※
10	三条三坊九・十・ 十一・十四・十五町、 三条四坊三町、 三条条間北小路、 三条条間小路、 三条条間南小路、 東三坊坊間東小路、 東三坊大路、 鶏冠井清水遺跡	発掘	L123	縄文時代晩期の土坑、弥生時代の溝・土坑、弥生時代から古墳時代の流路、長岡京期以前の落込み、長岡京期の東三坊大路西側溝・二条条間小路南北側溝・三条条間南小路南側溝・柱穴、中世の溝・落込み・湿地状堆積、西羽東師川旧流路を検出。	「30 長岡京左京二・三条三・四坊」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1987 年
11	三条三坊九町	発掘	L681	長岡京期の東三坊坊間東小路西側溝・土坑、中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京三条三坊九町跡発掘調査報告書』特定非営利活動法人平安京調査会 2023 年
12	三条三坊九・十町、 東三坊坊間東小路、 三条条間北小路	発掘	L554	長岡京期の東三坊坊間東小路西側溝・三条条間北小路南側溝・土坑、中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-19 埋文研 2013 年
13	三条三坊十町、 東三坊坊間東小路、 鶏冠井清水遺跡	発掘	L571	長岡京期以前の溝・土坑、長岡京期の東三坊坊間東小路西側溝、中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-3 埋文研 2014 年
14	三条三坊十一・十四町、 三条四坊三・四町、 東三坊坊間東小路、 東三坊大路、 三条条間南小路	発掘	L104	弥生時代の自然堆積、長岡京期の三条条間南小路南北側溝・建物跡・東三坊大路東西側溝・東三坊坊間東小路東側溝、中世の落込み・耕作溝、時期不明の溝を検出。	「37 左京三条三・四坊」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1985 年
15	三条三坊十五・十六町、 三条四坊一・二町、 東三坊坊間東小路、 東三坊大路、 三条条間北小路	発掘	L133	縄文時代後晩期～弥生時代の湿地状遺構、弥生時代の溝、長岡京期の東三坊大路東西側溝・区画溝・建物跡・柵列・井戸、中世の耕作溝を検出。	「34 長岡京左京二条三・四坊」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988 年

	調査位置 (左京を省略)	調査法	調査回数	調査成果概要	掲載文献
16	三条三坊十六町、 東三坊坊間東小路	発掘	L607	弥生時代の柵施設を伴う流路、長岡京期の建物跡、長岡京期～平安時代の流路、中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京三条三坊十六町跡』京都平安文化財発掘調査報告第10集 有限会社京都平安文化財 2020年
17	三条四坊六町	発掘	L560	縄文時代晩期の流路、弥生時代の湿地状堆積・溝、古墳時代～飛鳥時代の溝、長岡京期の建物跡・柱列・区画溝、中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京三条四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-3 埋文研 2013年
18	三条四坊六町	発掘	L603	縄文時代晩期の流路、弥生時代の湿地状堆積・溝、長岡京期の建物跡・柱列・井戸・溝・湿地状堆積、中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京三条四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-4 埋文研 2018年
19	三条四坊八町、二条大路、 東四坊坊間小路	試掘	-	中世の耕作溝を検出。	「Ⅵ 試掘調査一覧表：No.119」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』文化市民局 2021年 ※
20	三条四坊十・十一町、 三条条間小路	発掘	L529	長岡京期の三条条間小路南北側溝・建物跡・土坑、中世の耕作溝・柱穴を検出。	『長岡京左京三条四坊十・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-16 埋文研 2009年
21	三条四坊十二町、 四条四坊九町、 三条大路	試掘	-	長岡京期の三条大路南北側溝・溝、中世の耕作溝を検出。	「Ⅴ-7 長岡京左京三条四坊十二町・四条四坊九町・三条大路跡 No.126 (20NG271)」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』文化市民局 2021年
22	三条四坊十三町、 四条四坊十六町、 三条大路	発掘	-	古墳時代の溝、長岡京期の三条大路南北側溝・建物跡・柵列・井戸・土坑、平安時代以降の耕作溝を検出。	「66 長岡京左京三条・四条四坊」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
23	三条四坊十三町、 三条条間南小路、 東四坊大路	発掘	L517	鎌倉時代から室町時代の溝・畦・土坑、時期不明の溝を検出。	『長岡京左京三条四坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-17 埋文研 2007年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所 文化市民局→京都市文化市民局

調査回数は長岡京連絡協議会による。

※は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課より試掘データの提供を受けた。

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図7・8・9）

調査地における地表面の標高は11.9～12.0mを測る。当地の基本層序は、地表より現代盛土、現代耕作土、近世耕作土、中世耕作土、遺構検出面である基盤層によって構成される。基盤層より上層はグライ化した水平な粘質土層が順次堆積しており、長岡京廃都後から現代に至るまで水田耕作が連綿と続いていたことが窺える。

現代盛土は現代水田を造成した際の盛土であり、地表面より0.2～0.3m下にて現代水田作土面を確認した。層厚は0.1mで、底面には竹管を伴う南北方向の暗渠排水溝が走る。その下には近世耕作土が堆積し、上層が層厚0.15～0.2m、下層が層厚0.1～0.2mである。当該層では遺物は出土していないが、江戸時代初頭に久我荘の領地替があったことから、この時期において当地の水田耕作は一時断絶するものの、再生利用されたものと推測される。中世耕作土は層厚0.1～0.15mで、その直下が遺構検出面である基盤層上面である。中世耕作土より南北朝期から室町時代の遺物が出土している。なお、基盤層上面で検出した素掘り溝群は平安時代末期から鎌倉時代後半に属することから、中世耕作土と素掘り溝群の成立時期は異なるものとみられる。

遺構基盤層はマンガン斑を多く含んだ灰白色～黄褐色粘質土層で、桂川の氾濫によって運搬された細粒泥砂などの堆積物から形成された層である。基盤層上面は調査区全域においてほぼ水平に認められ、標高は11.15mを測る。調査区内において当該層に炭化物と焼土塊が集中して含まれるエリアが点在し、そのうち2箇所を炭化物分布地点060・061と認識して補足調査を行った。これらは断割後に記録作業を行い、採取した炭化物は自然科学分析を行った。その結果、この炭化物は縄文時代後期のアカガシ亜属であることが判明した（附章掲載）。

遺構基盤層より下層の堆積状況は井戸051南北断割の断面観察にて確認した（図16）。基盤層上面より0.7m下、標高10.4mの深さにてグライ化した粘性の強い粘土層、基盤層上面より1.2m下、標高9.9mの深さにて大小の礫を多く含む灰色砂礫層を検出している。灰色砂礫層は現在も湧水が激しく、桂川から供給される伏流水の水みちとして現在も機能していることが窺える。

2 検出遺構（表2）

今回の調査では、中世の遺構群と長岡京期以前の遺構群を同一面で検出したため、中世の遺構群を第1－1面、長岡京期以前の遺構群を第1－2面と設定した。第1－1面では平安時代末期から鎌倉時代後半の素掘り溝群と室町時代の土坑、第1－2面では長岡京期の建物と井戸、長岡京期以前の炭化物分布地点を検出している。

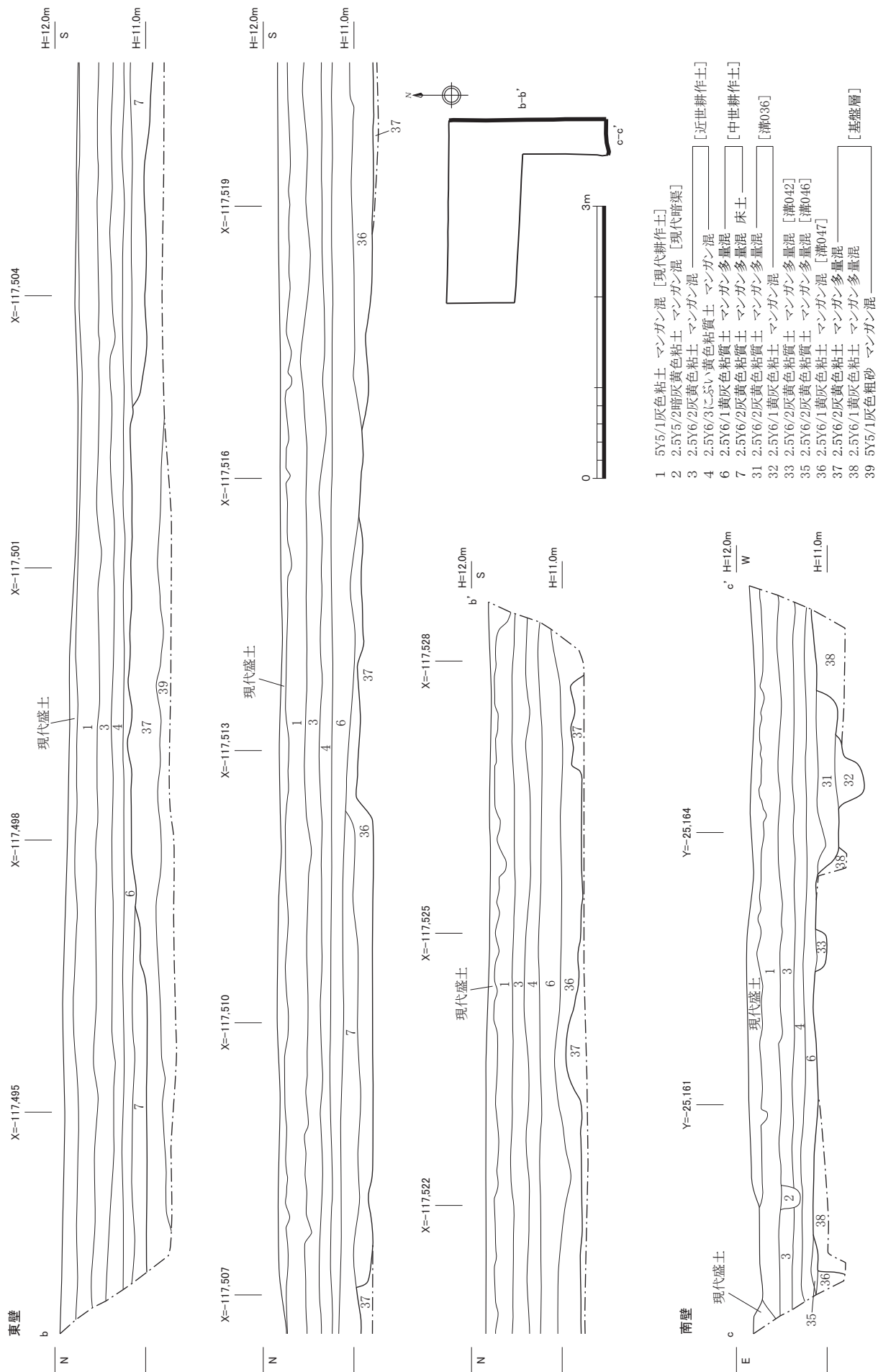


図8 調査区東壁断面図・南壁断面図1 (1 : 60)

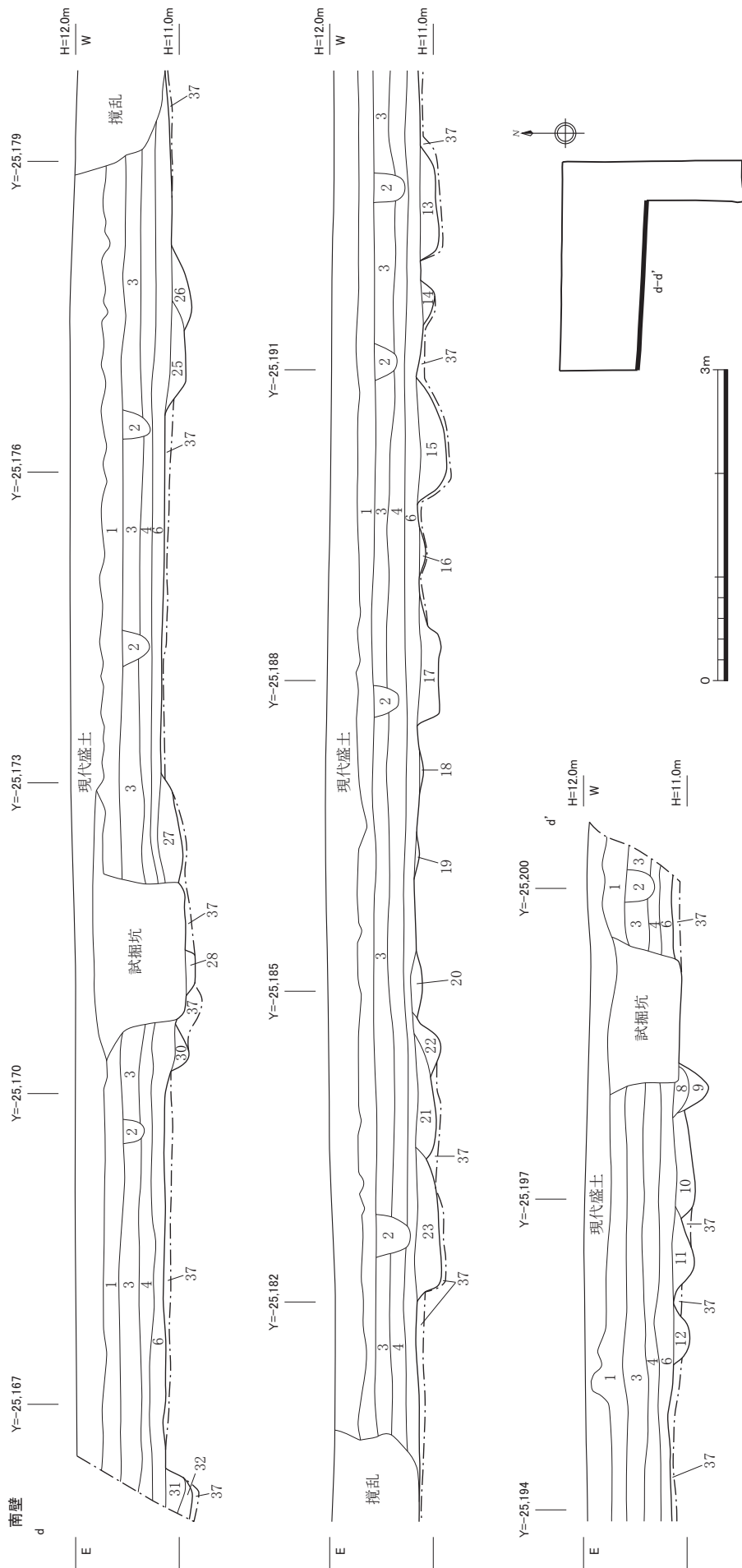


図9 調査区南壁断面図2 (1 : 60)

- | | | | |
|----|----------------|---------|---------|
| 1 | 5Y5/1灰色粘土 | マンガン混 | [現代耕作土] |
| 2 | 2.5Y5/2暗灰色粘土 | マンガン混 | [現代暗渠] |
| 3 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン混 | |
| 4 | 2.5Y6/3にぶい黄色粘土 | マンガン混 | [近世耕作土] |
| 6 | 2.5Y6/1黄灰色粘土 | マンガン多量混 | [中世耕作土] |
| 8 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | |
| 9 | 2.5Y6/1黄灰色粘土 | マンガン混 | |
| 10 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝025] |
| 11 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝003] |
| 12 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝006] |
| 13 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝009] |
| 14 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝010] |
| 15 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝011] |
| 16 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝012] |
| 17 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝013] |
| 18 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝014] |
| 19 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝015] |
| 20 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝017] |
| 21 | 2.5Y6/1黄灰色粘土 | マンガン混 | |
| 22 | 2.5Y6/3にぶい黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝018] |
| 23 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン混 | [溝019] |
| 25 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | |
| 26 | 2.5Y6/1黄灰色粘土 | マンガン混 | [溝021] |
| 27 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | |
| 28 | 2.5Y6/1黄灰色粘土 | マンガン混 | [溝022] |
| 30 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [溝038] |
| 31 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | |
| 32 | 2.5Y6/1黄灰色粘土 | マンガン混 | [溝036] |
| 37 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | マンガン多量混 | [基礎層] |

※土色は調査区北壁・東壁と共通



図10 第1-1面調査区全体平面図 (1:250)

表2 遺構概要表

検出した遺構の総数：53

時代	主な検出遺構	備考
長岡京期以前	建物1・2、井戸051、炭化物分布地点060・061	
平安時代末期～鎌倉時代	素掘り溝群、土坑052	溝 001・003・006・007・008・009・010・011・012・013・014・015・017・018・019・020・021・022・023・025・026・036・037・038・039・040・042・044・046・047・050
室町時代	土坑004・005	

(1) 第1-1面(図10、図版2-1・2、3-1・2)

素掘り溝群

調査区全体で31条検出した。いずれも南北方向の溝で、調査区外に貫通する。埋土は灰黄色～黄灰色粘質土、断面形はU字形或いは逆台形を呈する。埋土より平安時代末期から鎌倉時代後半に属する土師器皿、東播系須恵器鉢、瓦器碗などが出土しており、久我荘成立期に機能していた耕作関連の溝と推測される。

検出した素掘り溝群はY=-25,182を境として、東と西で2つのグループに分かれる。Y=-25,182以西では非常に密に溝が分布するが、それより以东では溝の間隔が広くなり、約6m間隔で配される。溝幅においても、この座標を境として以西では大型のものが1.0～1.5m、小型のものが0.3～0.5mとばらつきがあるが、以东になると溝幅が大型のもので2.1m、小型のもので0.3mと統一される。深さは大型の溝で0.15～0.25m、小型の溝で0.05～0.35mを測る。二段掘り構造を持つ溝036のみ深く、0.45mを呈する。溝の方位は、Y=-25,182以西の一群は北で西に0.3°振るが、それより以东では北で西に1.0°振るようになる。溝の振れ角は現代の水田境界とも一致する。大型の溝のなかには溝内に畝が走り溝が細分されるものも認められた。溝036と溝046では鋤が使われた痕跡も確認されている。1単位の幅約20cm、深さ約4.5cmで、溝肩に沿って南北方向に走る。

Y=-25,180の座標は現代の水田境界となっており、久我荘成立期の条里地割が現代まで引き継がれていることが窺える。

土坑004・005(図11、図版4-1～3)

調査区北西寄りにて検出した。平安時代末期から鎌倉時代後半に帰属する素掘り溝群を切り込むことから、当調査で検出された遺構群の中で最も新しい時期に成立したものである。掘方の平面形は隅丸方形を呈する。土坑004は南北に長く、土坑005は東西に長い。土坑005の西端は土坑004によって切られている。検出規模は、土坑004が南北約6.0m、東西約1.7m、深さ0.1m、土坑005が南北1.85m、東西約4.2m、深さ0.22mを測る。埋土はいずれも暗灰黄色粘質土で、土坑004より室町時代に属する瓦質土器火鉢・羽釜の小片が出土している。

土坑052 (図12、図版5－1・2)

調査区中央北東寄りにて検出した。掘方の平面形は隅丸方形を呈する。西端は試掘坑によって切られており、検出規模は南北約1.5m、東西約2.8m、深さ0.12mを測る。埋土は黄灰色粘質土で、その内より瓦器などの土器小片が認められたことから、平安時代末期から鎌倉時代後半に属するものと考えられる。この遺構の直下にて長岡京期に属する方形木組井戸（井戸051）を検出した。

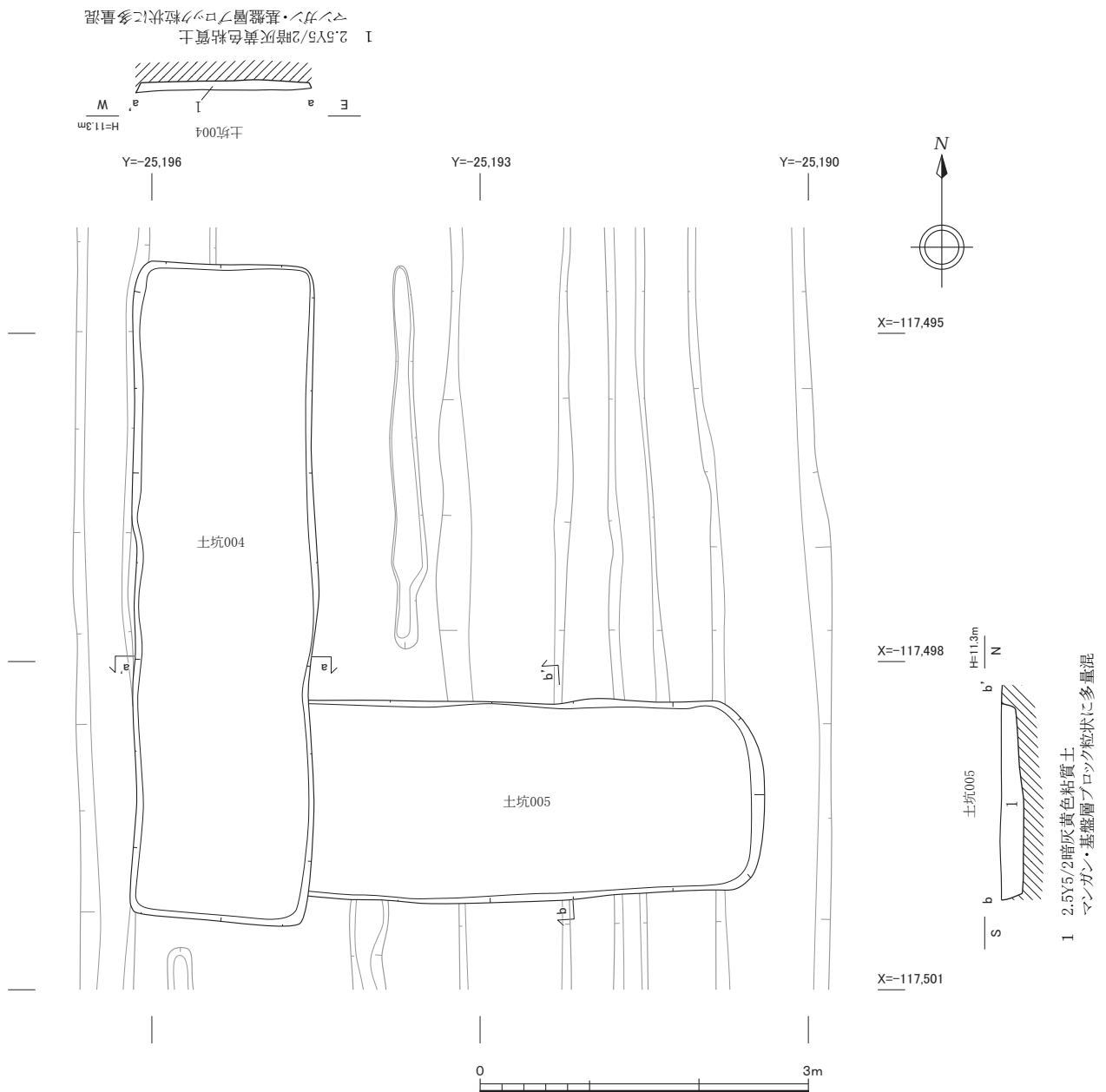
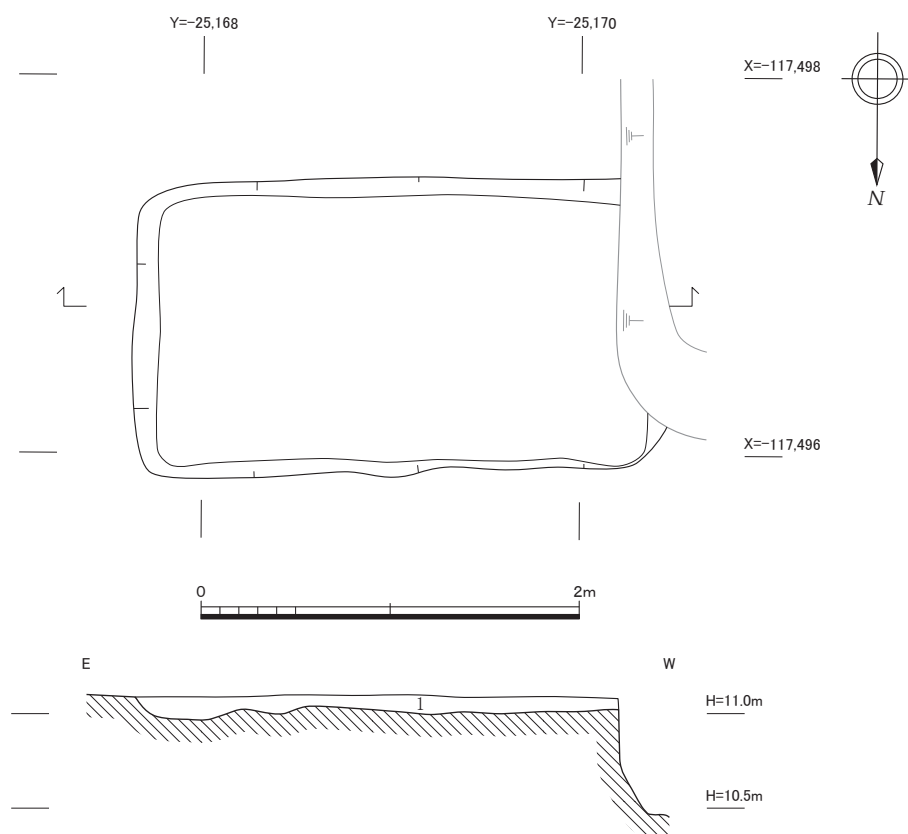


図11 西区 土坑004・005平断面図 (1 : 60)



1 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン・基盤層ブロック・炭化物多量混

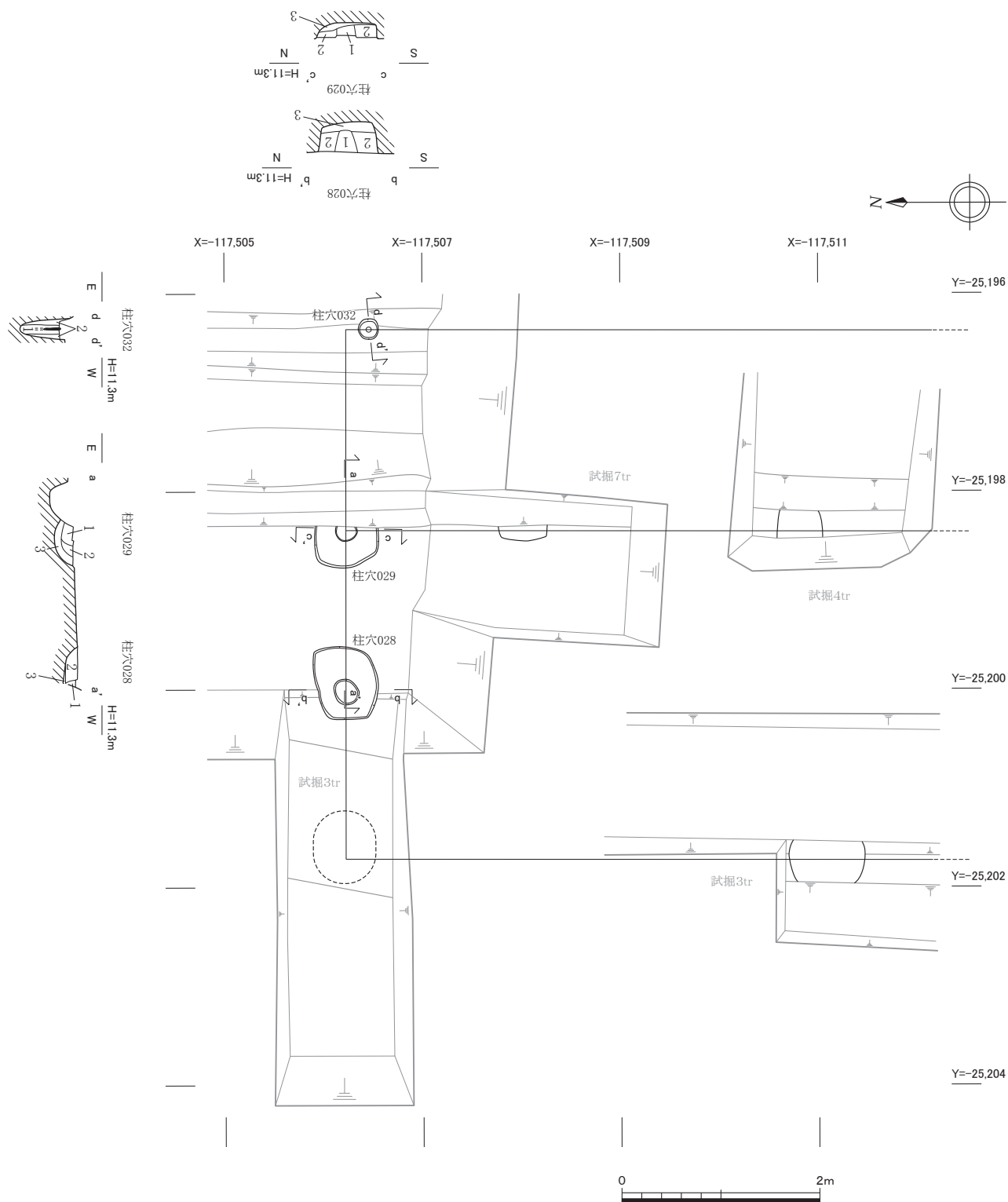
図12 東区 土坑052平断面図（1：40）

（2）第1－2面（図13、図版6－1・2、7－1・2）

建物1（図14、図版8－1～4）

調査区南西隅にて検出した南北棟の掘立柱建物である。調査区内では柱穴028・029・032を検出した。柱穴028・029の掘方は隅丸方形で、一辺0.65～0.7m、検出面からの深さ0.2～0.3mを測る。身舎に伴う柱穴とみられる。柱当の埋土は黄灰色粘質土、柱掘方の埋土は黄灰色～灰黄色粘質土である。柱穴032は小型で柱材が残存しており、庇を支える柱穴と考えられる。掘方は円形で、径0.2m、検出面からの深さ0.45mを測る。埋土は灰黄色粘土である。

また、当調査の実施前に京都市文化財保護課が先行して行った試掘調査結果と照合した結果、試掘4トレンチと7トレンチにて柱穴029から南側へ延びる柱穴が2基、試掘3トレンチにて柱穴028より1間分西側の南延長部に位置する柱穴が1基確認された。これにより、身舎は東西2間分、南北2間分を検出したことになる。柱間は東西約1.65m（5.5尺）、南北約1.8m（6尺）～2.7m（9尺）を測る。東庇とみられる柱穴032と身舎北東角の柱穴029との距離は約2.0m（6.7尺）である。建物の方位は北で西に0.16°振る。



- 柱穴028
- 1 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン・基盤層ブロック粒状に多量混 [柱当]
 - 2 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン多量混 基盤層ブロック粒状に混 [掘方]
 - 3 2.5Y6/2灰黄色シルト マンガン多量混
- 柱穴029
- 1 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン・基盤層ブロック粒状に多量混 [柱当]
 - 2 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン多量混 基盤層ブロック粒状に混 [掘方]
 - 3 2.5Y6/2灰黄色シルト マンガン多量混

- 柱穴032
- 1 2.5Y6/2灰黄色粘土 マンガン混 [柱当]
 - 2 2.5Y6/2灰黄色粘土 マンガン多量混 [掘方]

図14 西区 建物1平断面図（1：60）

建物2（図15、図版9－1～5）

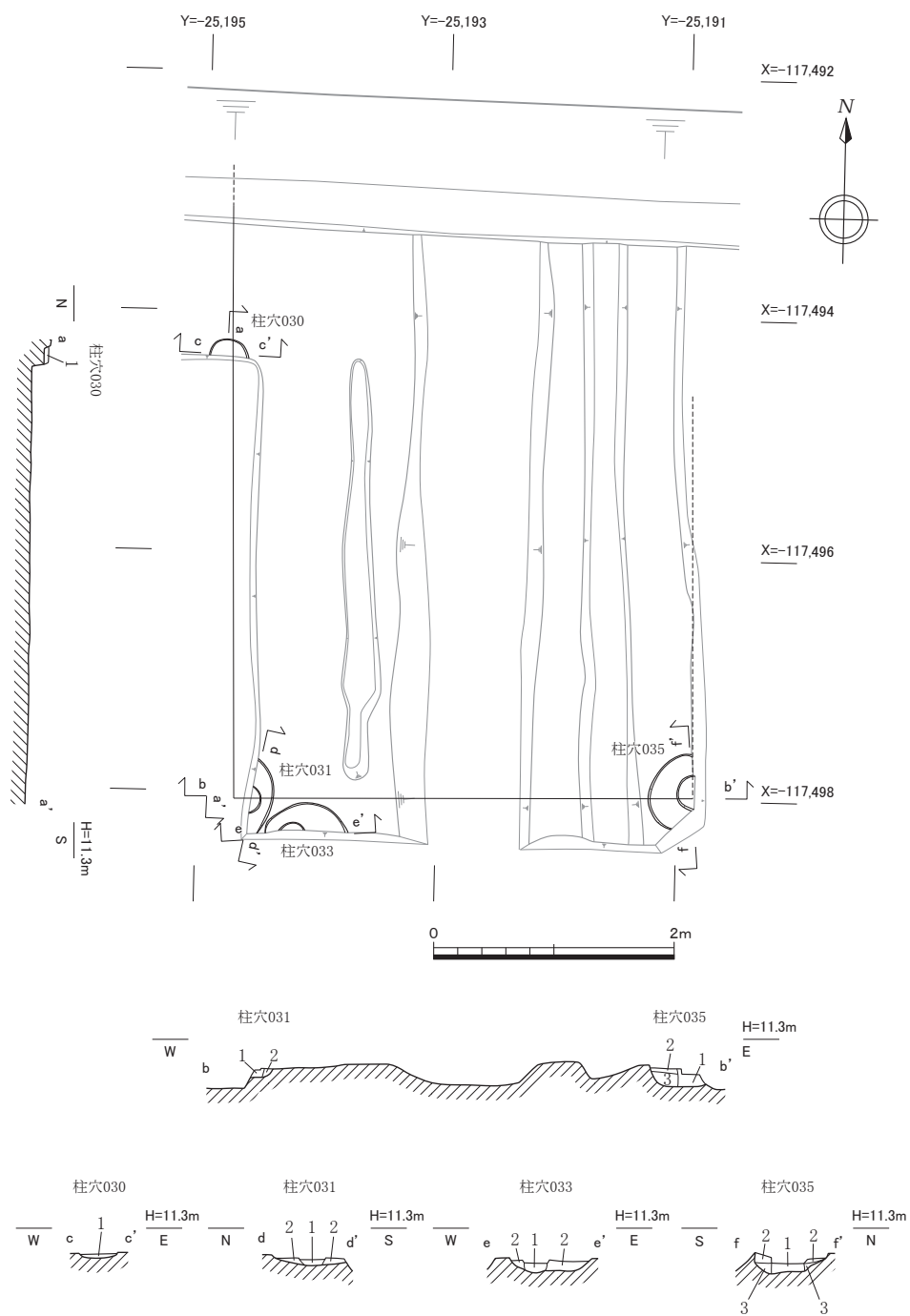
調査区北西部にて検出した南北棟の掘立柱建物である。柱穴030・031・035で構成される。柱穴033は柱穴031と隣接することから、柱の建て替えの可能性がある。東西1間分、南北1間分を検出した。柱間は3.6m（12尺）等間である。柱間が広すぎることから、間に柱穴が存在したものと考えられるが、中世の遺構群によって周囲が大きく削平されており、全容は不明である。建物の方位は北で西に1.2°振る。柱穴の掘方はいずれも円形で径0.3～0.7m、検出面からの深さは0.06～0.18mである。西側の柱穴群が比較的浅いことから、久我荘開墾の際に削平された可能性が推測される。

井戸051（図16、図版10－1・2）

調査区中央北東寄りにて土坑052直下より検出した方形木組井戸である。井戸の掘方は南北約1.8m、東西約2.4mで、井戸枠は一辺約0.9mを呈する。井戸底部までの深さは検出面より約1.8mを測る。底部施設は残存していなかったが、枠内埋土より曲物底板が出土していることから、集水施設が設けられていた可能性が推測される。井戸枠の構造は方形縦板組隅柱横棧留型で、一辺0.09mの隅柱に横棧を柄で組み、東西方向と南北方向で段差をつけて設定する。縦板は幅約0.17mで、各面に6～7枚用い、裏側には板材をさらに重ねて補強していた。横棧は2段分残存しており、1段目から2段目までの間隔は約0.9mを測る。井戸枠内の埋土は上位がマンガン斑を多量に含んだ灰色粘質土、下位が礫混じりの褐灰色粘土である。埋土からは長岡京期の土器類が出土した他、斎串・土馬などの祭祀遺物も認められた。井戸枠の裏込土は上位が小石混じりの灰黄色粘質土～粘土、下位がグライ化の進んだ灰色粘土で、長岡京期の丸瓦片が見つかった。井戸は現在も水が枯れておらず、基盤層下層の灰色砂礫層より激しく湧水し、常に横棧2段目まで水が及んでいた。横棧2段目の標高は10.4mを測る。なお、調査地南西側の発掘調査（18）にて検出された長岡京期の湿地堆積の標高が10.45～10.6mであるのを踏まえると、当時の地下水位から大きく変動していないことが推測される。井戸掘方断割掘削中に南面の掘方が崩壊したため、西面2段目の横棧のみ井戸枠材を回収した。

炭化物分布地点060・061（図17）

炭化物分布地点060・061は遺構基盤層である灰黄色～黄褐色粘質土層上面に堆積した自然堆積である。基盤層上面では長岡京期や中世の遺構が検出されていることから、長岡京期以前に成立したものと推測される。層内には1.0～3.0cm大の炭化物とともに土器片の残骸とみられる径0.5～1.0cmの赤い粒状の焼土塊が混じっていた。この炭化物を試料に樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代後期に属するアカガシ亜属であることが判明した（附章掲載）。調査地周辺の発掘調査においても縄文時代後晩期に属する流路や湿地状遺構が検出されており（15・17・18）、当地の遺構基盤層も氾濫原堆積物によって形成された沖積層であることから、この流路の洪水で運び込まれた自然木が炭化・分解したものと考えられる。



柱穴030
1 2.5Y6/2灰黄色粘質土 マンガン混

柱穴031
1 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン多量混 [柱当]
2 2.5Y6/2灰黄色粘質土 マンガン多量混 [掘方]

柱穴033
1 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン多量混 [柱当]
2 2.5Y6/2灰黄色粘質土 マンガン多量混 [掘方]

柱穴035
1 2.5Y6/1黄灰色粘質土 マンガン多量混 [柱当]
2 2.5Y6/2灰黄色粘質土 マンガン多量混 [掘方]
3 2.5Y6/1黄灰色粘質土 1よりマンガン多量混 [掘方]

図15 西区 建物2平面図 (1:60)

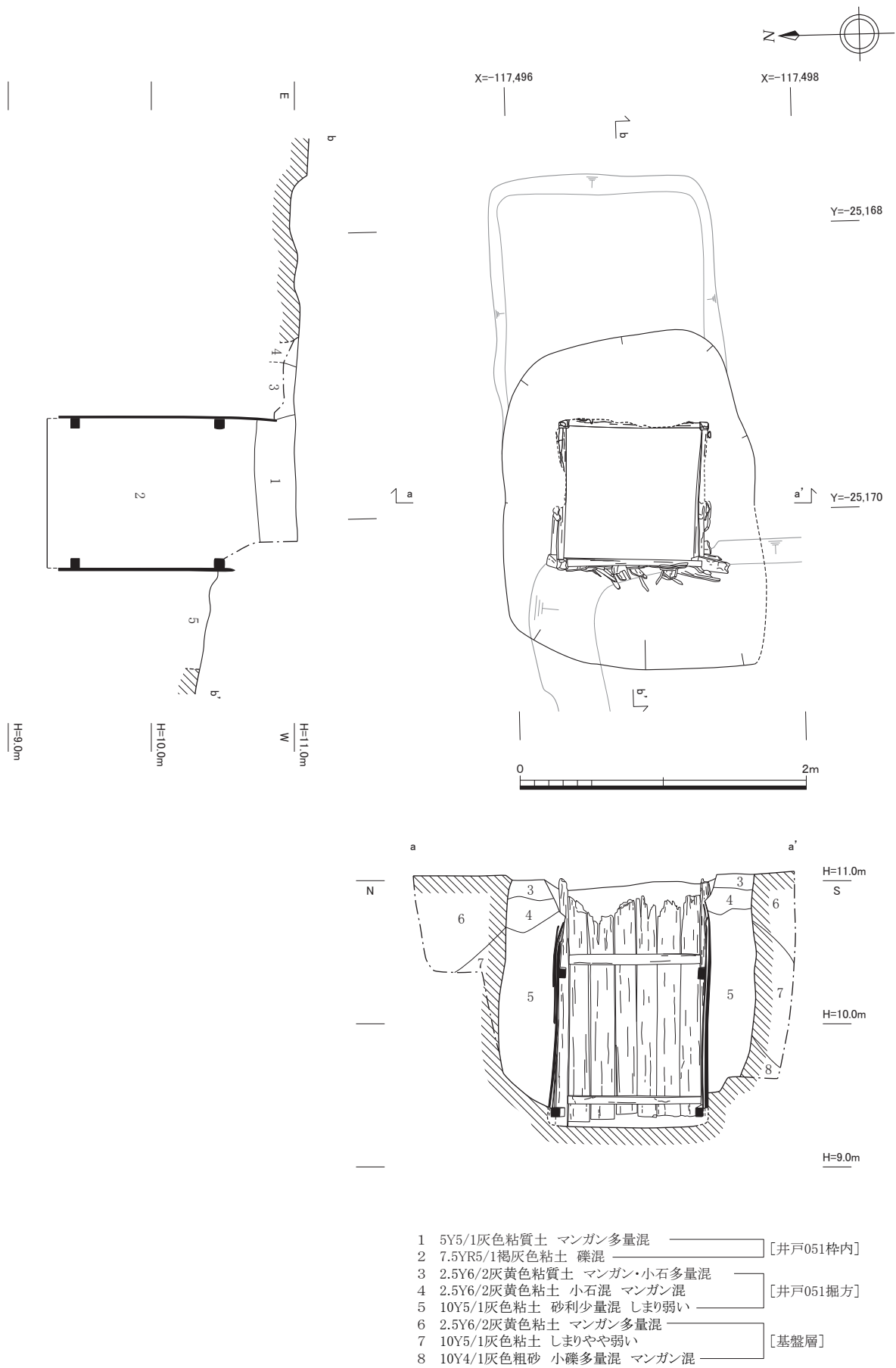
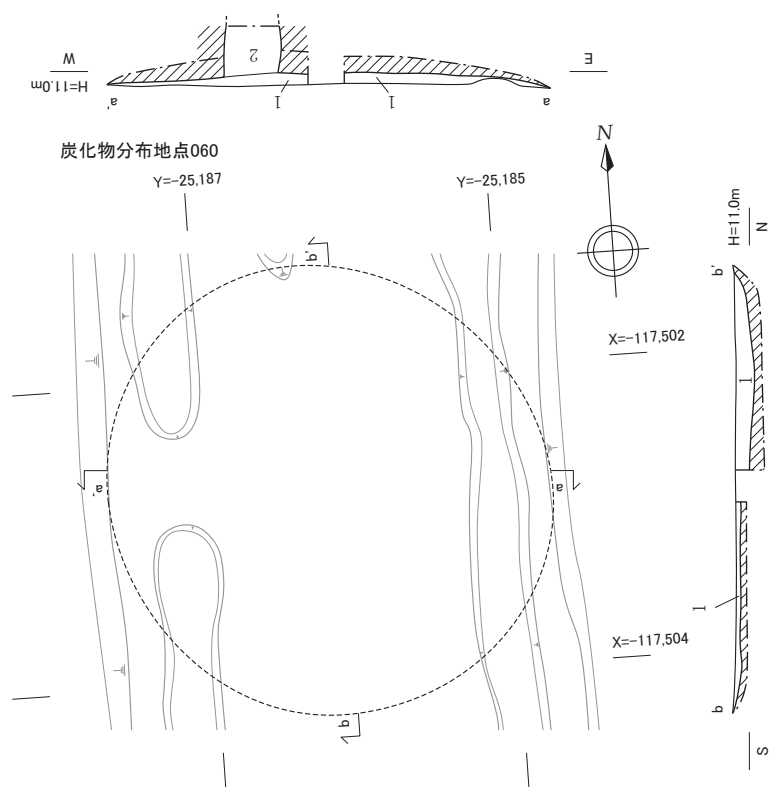
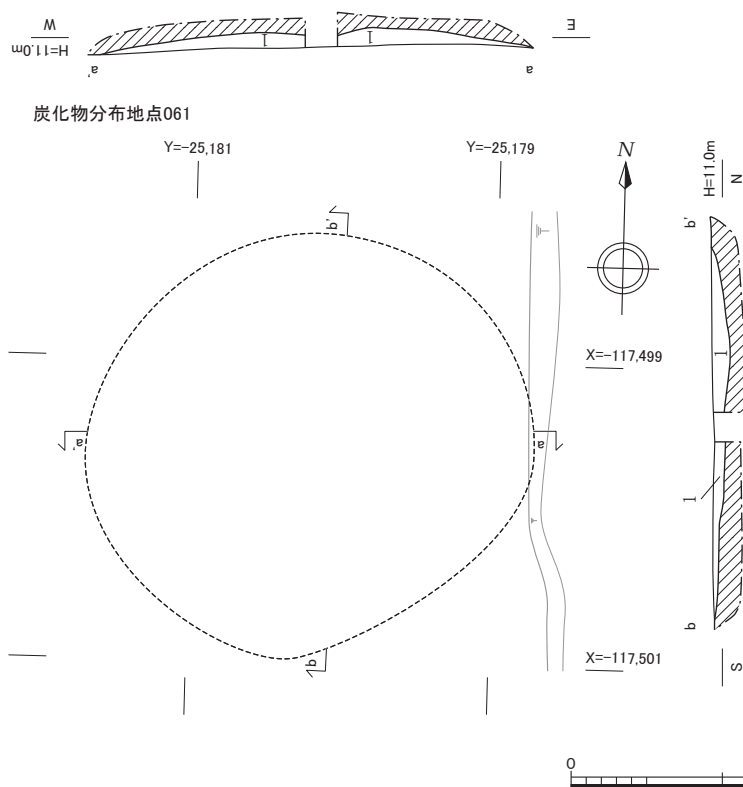


図16 東区 井戸051 平断立面図 (1 : 40)

- 1 2.5Y6/2灰黄色粘質土・ヤンガノ多量混、炭化物・焼土塊混
2 2.5Y6/2灰黄色粘質土+2.5Y3/2黒褐色粘土・ヤンガノ・炭化物多量混 [木の根痕あり]



- 1 2.5Y6/3にぶい黄色粘質土・ヤンガノ・炭化物・焼土塊(土器?)多量混



0 2m

図17 西区 炭化物分布地点060・061平断面図(1:50)

3 出土遺物

遺物はコンテナに3箱分出土した。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、土製品、木製品、銭貨が出土している（表3）。

第1－2面では井戸051からのみ遺物が出土しており、所属時期は長岡京期である。第1－1面では素掘り溝群より平安時代後期から鎌倉時代後半の遺物、土坑004より室町時代の遺物が出土している。中世耕作土及び重機掘削では、南北朝期から室町時代の遺物が確認された。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク 点数	C ランク 箱数
長岡京期	土師器、須恵器、 土製品、瓦、木製品		土師器3点、須恵器5点、 土製品1点、瓦2点、木製品3点		
平安時代～ 鎌倉時代	土師器、須恵器、 瓦器、瓦質土器、磁器、 金属製品		土師器1点、須恵器1点、瓦器3点、 瓦質土器1点、磁器1点、 金属製品1点		
南北朝期～ 室町時代	瓦質土器、焼締陶器、 磁器		瓦質土器2点、焼締陶器1点、 磁器1点		
合計		5箱	26点（3箱）	0点	2箱

*コンテナ箱数は、整理段階で2箱増加した。

(1) 第1－22

井戸051（図18、図版11－1・2、13－1・2）

1～3は土師器である。1は皿Cで、口径9.5cm、器高2.1cmと小型品である。口縁部にヨコナデ調整が施されるが、底面は未調整で外面に指圧痕が残る。外面に煤の付着が認められることから、灯明皿として用いられたものと考えられる。2は碗である。口径12.7cm、器高3.4cmを測る。器形は丸く、底部から内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部外面及び内面全体にて強いヨコナデが施され、底部外面には指圧痕が残る。3は高杯脚柱部である。心棒づくりで、外面は7角形に面取りした後、ヘラミガキで仕上げられる。

4～6は須恵器である。4・5は杯Aである。4は口径13.7cm、底径8.6cm、器高4.8cm。平坦な底部から口縁部は直線的に外傾し、端部は丸くおさめられる。内外面にロクロナデが施され、底部外面にはヘラオコシ痕が残る。外面全体に二次被熱の痕跡が認められる。5は底部のみで、底径9.6cmを測る。内外面はロクロナデ調整、底部外面にはヘラキリ痕が認められる。6は壺Lの底部である。高台径10.8cm。底部外面に回転ケズリ、体部内外面にロクロナデが施され、底部外面はヘラキリ後に高台が貼り付けられる。

7は土馬である。頭部のみの残存で、長5.2cm、幅2.0cmを測る。三日月型を呈し、目は竹管による刺突で表現される、いわゆる「大和型」である。

8・11は丸瓦である。8は玉縁式で、凹面に布目痕、凸面はヨコ方向のナデ調整によって叩き痕

が消されている。玉縁部と丸瓦部をつなぐ接合痕が認められる。11は凹面に布目痕、凸面に叩き痕が残る。赤色に変色していることから、二次被熱を受けたものか。

9・10は木製品である。9は曲物底板で、復元径19.0cm、厚さ0.65cmを測る。側面に5箇所の釘穴があり、表面に漆の付着が認められる。10は斎串である。長さ21.9cm、幅3.2cm、厚さ0.4cm。圭頭状に頭部の両隅に切り込みが認められる。

12は井戸枠の部材である。西面の2段目に用いられた横棧であり、長さ100.8cm、幅7.6cm、厚さ5.1cmを測る。内面側に柄状の面取りが施され、側面には槍鉋による加工痕が認められる。

1～10は枠内からの出土で、11のみ掘方からの出土である。いずれも1B段階に属し、長岡京期に比定される。

(2) 第1-1面

素掘り溝群(図19、図版12-1)

13は土師器の皿Nである。口径10.0cm、器高1.6cmで、口縁立ち上がり部が強く外反し、内面底部にハケメ調整が認められる。6C段階に属し、鎌倉時代中頃に比定される。

14～16は瓦器碗である。いずれも底部が欠損している。14は口径13.0cmで、口縁部外面及び内面にヘラミガキが施されるが、体部外面には認められずナデ調整のみとなる。口縁端部内面には沈線が刻まれる。楠葉型のⅡ-3段階に属し、平安時代末頃の所産とみられる。15は口径11.1cm、16は口径11.4cmを測る。口縁部外面及び内面のヘラミガキは数条のみで、体部外面はユビオサエのちナデのみで仕上げられる。口縁端部内面の沈線は認められない。楠葉型のⅣ-1段階に属し、鎌倉時代後半のものと考えられる。

17は瓦質土器の鍋である。口縁部のみの残存となり、口径26.0cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁断面が「L」字状を呈する受け口を持つ。口縁端部は平たく仕上げられる。体部外面にはオサエ、内面にはハケ調整が施される。外面に煤の付着が認められる。鎌倉時代後半の所産と考えられる。

18は東播系須恵器の片口鉢の口縁部である。小片のため、口径の復元はできなかった。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部が上方に突出して「く」の字形となる。胎土の色調が褐灰色であるが、口縁部縁帯は暗灰色を呈する。魚住窯産のものでⅢ-1段階に属し、平安時代末頃に比定される。

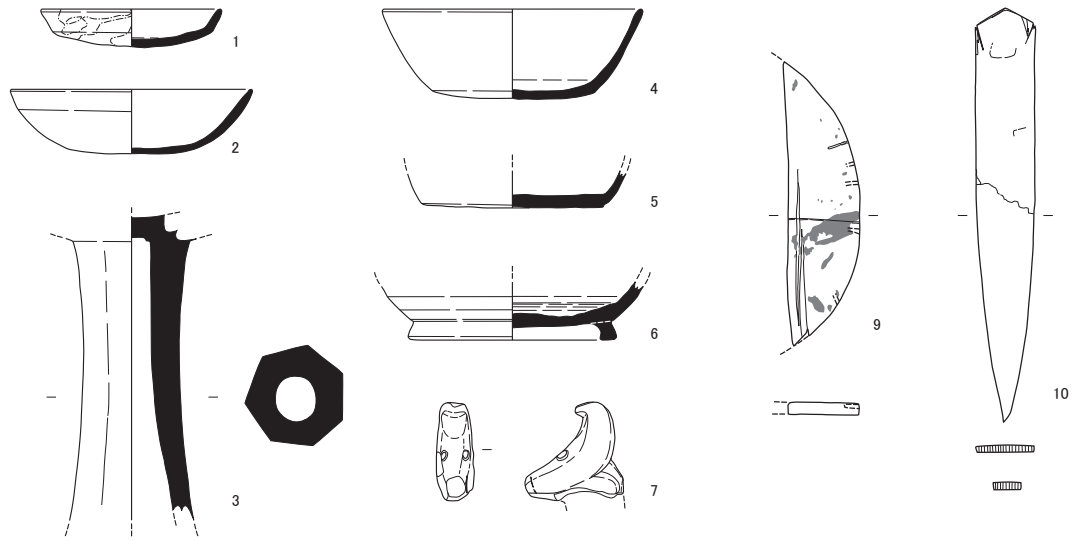
21は白磁の碗である。口径16.8cmで、口縁部が丸くおさめられた、いわゆる玉縁口縁碗である。胎土は微細な黒斑を含み、陶質に近い。広東省系のもので、平安時代後期に属する。

19・20は長岡京期の混入品で、いずれも須恵器である。19は杯Bで、口径14.9cm、高台径11.9cm、器高5.0cm。底部外面はヘラキリ後に高台が貼り付けられる。20は壺Aの底部である。高台径14.7cmで、底部外面に回転ケズリ、内面にロクロナデが施される。底部外縁に高台が貼り付けられる。

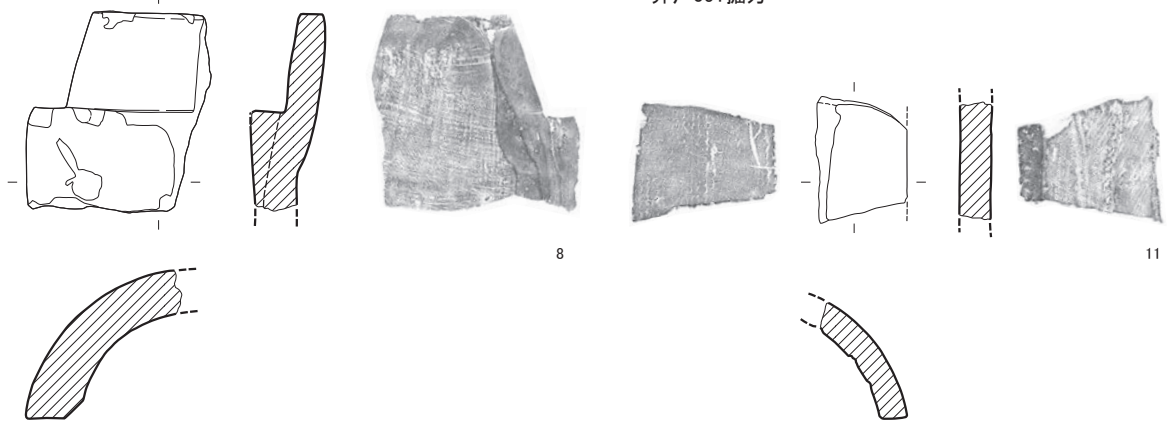
土坑004(図19、図版12-2)

22・23は瓦質土器である。いずれも小片のため、径の復元はできなかった。22は羽釜の口縁部

井戸051埴内



井戸051掘方



井戸051井戸埴材

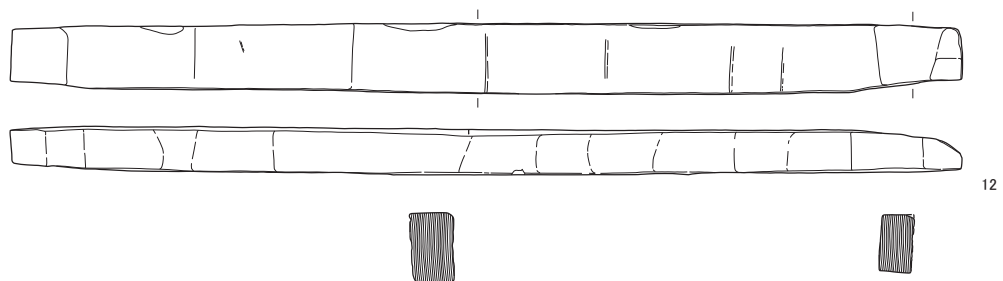
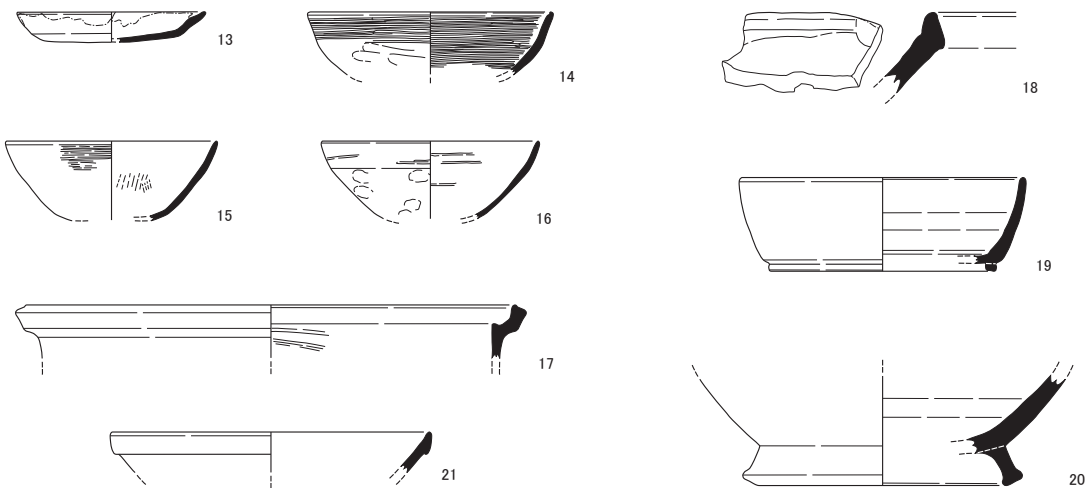
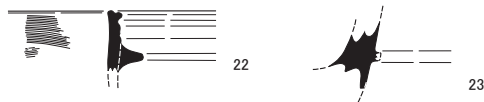


図18 出土遺物1 (1 : 4、1 : 8)

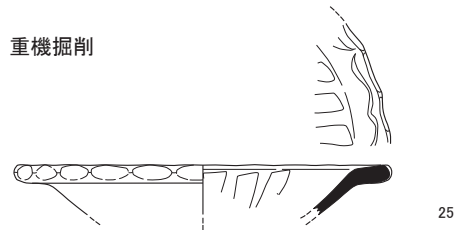
素掘り溝群



土坑004



重機掘削



中世耕作土

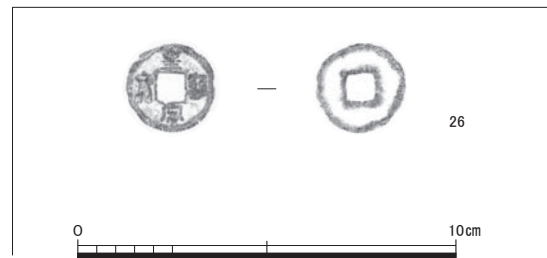
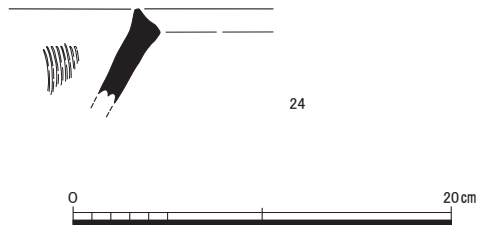


図19 出土遺物2 (1 : 2、1 : 4)

である。薄手のつくりで、口縁部外面の段が凹線状を呈する。内面にはハケ調整が認められる。23は火鉢の底部である。外面はヘラミガキ後に突帯が貼り付けられ、内面はナデ調整によって仕上げられる。室町時代以降の所産と考えられる。

(3) 中世耕作土・重機掘削 (図19、図版12-2、13-3)

24は備前の挿鉢である。小片のため、口径の復元はできなかった。口縁端部が上方に突出して「く」の字形となる。摺り目は8条である。IV A段階に属し、南北朝期から室町時代初頭に比定される。25は青磁の稜花盤である。口径19.6cmを測り、胎土は粗質の灰白色で、釉薬は灰緑色を呈する。龍泉窯系で、鎌倉時代末期から南北朝期の所産とみられる。26は銭貨で、皇宋通宝(篆書体)である。径2.4cm、厚0.12cm、重さ2.7g。北宋銭で、寶元・康定年間(1038～1040年)に铸造されたものとなる。平安時代後期の所産である。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、長岡京期の建物と井戸、中世の素掘り溝群と土坑が認められた。以下、これまでの記述と重複するところもあるが、これらの調査成果をまとめ、周辺の調査も併せながら歴史的環境の評価と考察を述べてゆきたい。なお、本文中で述べる調査地を示す調査番号は図6・表1に対応する。

1 長岡京期における左京三条四坊九町周辺の土地利用について（図20・表4）

古代都城の宅地分布について、宮に近いほど高級官吏が、宮から離れるほど下級官吏や一般京戸が居住したとされている⁽¹⁾。長岡京においても、左京北一・一・二・三条周辺にて諸司厨町や離宮が集中しており、高級官吏の居住エリアであったことが発掘調査によって明らかになっている。当地周辺でも正殿・後殿・脇殿で構成された大規模宅地が2ヶ所検出されている。

当調査で検出された長岡京期の遺構は、掘立柱建物2棟と方形縦板組隅柱横棧留型の井戸1基である。周辺調査と比べると遺構が希薄であるが、当地が宅地として活発な利用はされていなかったのか、中世以降の荘園開発に伴う削平を受けたのか判断がつかなかった。この問題について、周辺調査成果も併せながら、左京三条四坊九町とその周辺の宅地の利用形態について検討してゆきたい。

左京三条四坊周辺にて大規模宅地が認められたのは三条三坊十六町・三条四坊六町である。

三条三坊十六町では、宅地西半の真中を中軸として、正殿とみられる東西棟の南北両庇付建物と、その東側に脇殿とみられる南北棟建物が南北に2棟連なる建物配置が認められた(16)。正殿は梁間2間、桁行5間で、柱間は梁間2.9m(9.7尺)、桁行2.7m(9尺)を測る。脇殿は梁間2間、桁行4～5間だが、調査区外に延びる可能性がある。柱間は2.4m(8尺)である。また、南東隅1/16町では梁間2間、桁行4間を基調とした南北棟の庇付建物が南北に2棟連なって検出された(15)。建物は1/32町内に柱筋を揃えて整然と配されており、柱間は梁間2.4m(8尺)、桁行2.6m(8.6尺)、西底部のみ桁行2.7m(9尺)で統一される。これらの建物は西方の正殿・脇殿と離れるものの、正殿の南庇面と柱筋を揃えることから、中心的な建物群に付随する雑舎群と推測される。当町では南半1/2町のうち西半を正殿域、東半を雑舎域と分かれて空間利用されていたものと考えられる。1/2町分の検出となったが、正殿域の広がりによっては1町占地となる可能性がある。

三条四坊六町は北西部1/4町にて遺構群が認められた(17・18)。宅地西半の真中よりやや西寄りの中軸として東西棟の南北両庇付建物(正殿)と南面庇付建物(後殿)が並び、その周囲に付属建物が配される。正殿・後殿とも梁間2間、桁行5間で、建物の柱間は正殿が梁間2.5m(8.3尺)、桁行2.4m(8尺)、後殿が梁間2.4m(8尺)、桁行2.7m(9尺)と、後殿が正殿よりやや横長になる。付属建物は規模が一律でないものの正殿・後殿と柱筋を揃える。18にて認められた梁間1間、桁行5間の南北棟建物はその規模と位置から東脇殿の可能性がある。東脇殿の柱間は梁間5.0m(16.6尺)、桁行2.7m(9尺)、その他付属建物が1.8～2.7m(6～9尺)を測る。1町を南北に2分

割する位置には2本の東西溝が走る。小径の可能性が想定されるが、正殿の西方に配された逆「L」字状の柱列によって溝が行き止まることから、別の機能を持っていた可能性も考えられる。この溝によって区画された南西部1/4町は正殿域である北西部とは異なる空間利用がされていたものと推測される。井戸は底部の土居桁のみしか残存していなかったものの、その構造から隅柱を有しない型であったと考えられる。周囲の町で発見された井戸は縦板組隅柱横棧留型で、井戸枠の一辺は0.9～1.0mで収まる。当町で見つかった井戸は一辺1.35mと大型であることから、当町の居住者の位階の高さが窺える。町の東半は湿地堆積が広がっており、1/4～1/2町の宅地利用であったことが想定される。

左京三条四坊二町・九町・十一町は中小規模宅地であったと推測される。

二町は中央西寄りの1/32町にて遺構群が検出されている(15)。梁間2間、桁行4間の南北棟の小規模建物2棟が柱筋を揃えて東西に並び、建物の南面は1/32町の宅地割ライン上に位置する。柱間は梁間2.5m(8.3尺)、桁行2.2m(7.3尺)を測り、建物の間は柵列によって区画される。また、1町を東西に2分割する位置には南北溝が走る。東側に対の南北溝が検出された場合、小径となる可能性がある。建物の北側には幅広の東西溝と縦板組隅柱横棧留型の井戸が認められる。東西溝は北東から南西に向かってやや蛇行するものの、おおよそ1町を南北に2分割する位置に走る。これらを踏まえると、検出された宅地は1/4町と考えられる。2棟の雑舎の南方には主屋となる建物が存在する可能性も推測される。

九町では中央西寄りの2/32町にて遺構群が検出された(当調査)。建物の規模は調査区外に広がることから全容は不明であるものの、小規模建物であったことが推測される。建物1は北面が1/32町の宅地割上に位置する。東面に庇を持つ梁間2間、桁行2間以上の南北棟建物で、柱間は梁間1.65m(5.5尺)、桁行1.8m(6尺)～2.7m(9尺)を測る。身舎と東底部の柱間は約2.0m(6.7尺)である。建物2は1/32町の西側に位置する梁間1間、桁行1間以上の南北棟建物である。これらの柱間は梁桁とも3.6m(12尺)だが、柱間が広すぎる為間に柱穴が存在した可能性がある。同じ1/32町内では東側に縦板組隅柱横棧留型の井戸051が位置し、建物2と井戸051の距離は22.8m(76尺)を測る。井戸051の井戸枠は一辺約0.9mと、周辺の中小規模宅地で認められた井戸と同様の規格を持つ。建物1と2を区画する施設は検出されなかったことから、同じ宅地内の建物である可能性も考えられる。

十一町は北側中央西寄りにて梁間3間、桁行1間以上の東西棟の小規模建物が検出されるのみで、全容は不明である(20)。建物の柱間は梁間2.1～2.25m(7～7.5尺)、桁行1.95m(6.5尺)を測る。

以上、左京三条四坊周辺の土地利用の形態について各町ごとに検討した結果、以下の傾向を読みとることができた。

大規模宅地は三条三坊十六町・三条四坊六町、中小規模宅地は三条四坊二町・九町・十一町にて認められた。遺構群の配列状況から、三条三坊十六町は1/2～1町、三条四坊六町は1/4～1/2町、三条四坊二町は1/4町の占地になることが推測される。

三条四坊九町では小規模建物が検出されたが、周辺と比べても密度がまばらである。周辺調査成

果においても東四坊坊間小路より以西は遺構が希薄となり、小規模宅地しか認められなくなる。建物2を構成する柱穴群も検出面からの深さが浅いことから、中世の荘園開墾時に削平を受けた可能性が考えられる。調査地周辺の基盤層検出面の標高値よりコンターラインを作成した結果、三条四坊より以西では北西から南東にかけて0.3%の勾配で傾斜することが判明した。長岡京左京の南北の標高の勾配は0.1%である⁽²⁾点を踏まえると、当地周辺の基盤層面は比較的急な勾配を有する。これが旧西羽東師川由来の原地形によるものであるのか、または排水不良農地の傾斜化を目的とした後世の削平によるものなのかは立証できないが、中世遺構の埋土中より長岡京期の土器類が混入することからも、ある程度の攪乱は受けているものと想定される。

また、大規模宅地の正殿域を構成する大型建物は1/32町の宅地割に柱筋を揃えるが、宅地割内に建物が収まるものは認められなかった。一方、宅地の規模に関わらず、雑舎群はいずれも1/32町の宅地割内に建物が収まる。大型建物に居住する高級官吏とは異なり、雑舎群に居住する下級官吏は1/32町の宅地班給の制約があったことが窺える。

15～18の調査で検出された縄文時代後晩期から弥生時代の溝及び湿地状堆積は西羽東師川の旧流路に付随するものと推測される。現在の西羽東師川は西山丘陵を源流として北西から南東に向かって走り、久世東土川町より流れを南に変え、淀樋爪町で桂川に合流するが、当時は流れを変えずに桂川に流入していたものとみられる。当地一帯に広がる基盤層も同時期に堆積することから、旧西羽東師川の氾濫堆積によって形成された可能性がある。旧流路一帯には大規模宅地が集中するのも興味深い。

2 中世以降の条里について（図21）

平安時代以後、長岡京域一帯は荘園化が進み、条坊地割から条里地割へと改編された。当地においても平安時代末期より久我家が管轄する久我荘として組み込まれる。調査地は久我里2坪の北西部に比定される⁽³⁾。大正十一（1922）年『都市計画基本圖』では当地の小字は「二ノ坪」と記されており、その小字界も現代の水田境界とほぼ一致していることから、今日に至るまで条里地割が遺存していた地域と考えられる。応永三（1396）年に作成された「久我本荘検注帳」によると、久我里2坪は3反分の「定使給」であったと表記されている。

長岡京域内に現存する条里地割は、長岡京廃都後に遷都以前のプランを踏襲するパターン、或いは新たに設定されたプランのもとに条坊から条里へ転換されたパターンの二通りが考えられる。当地周辺の条里と長岡京の条坊を照合したところ、東西方向の坪境が条坊或いは条坊内の宅地割ラインと一致しており、条里地割を施工する段階において条坊プランを意識していることが窺える。

本調査では条里地割に関わる遺構として、平安時代末期から鎌倉時代後半に属する素掘り溝群を検出した。これらの溝は全て南北方向で、埋土は粘質土を呈する。Y=-25,182を境に東と西で配置のあり方が異なり、この座標より以东では約6m間隔で配されるものの、以西では密に分布する。Y=-25,182は現代の水田境界に位置しており、当時の条里地割が現代まで継承されていることが窺える。素掘り溝群の上位には室町時代の遺物を包含する耕作土が堆積しており、この田地がそ

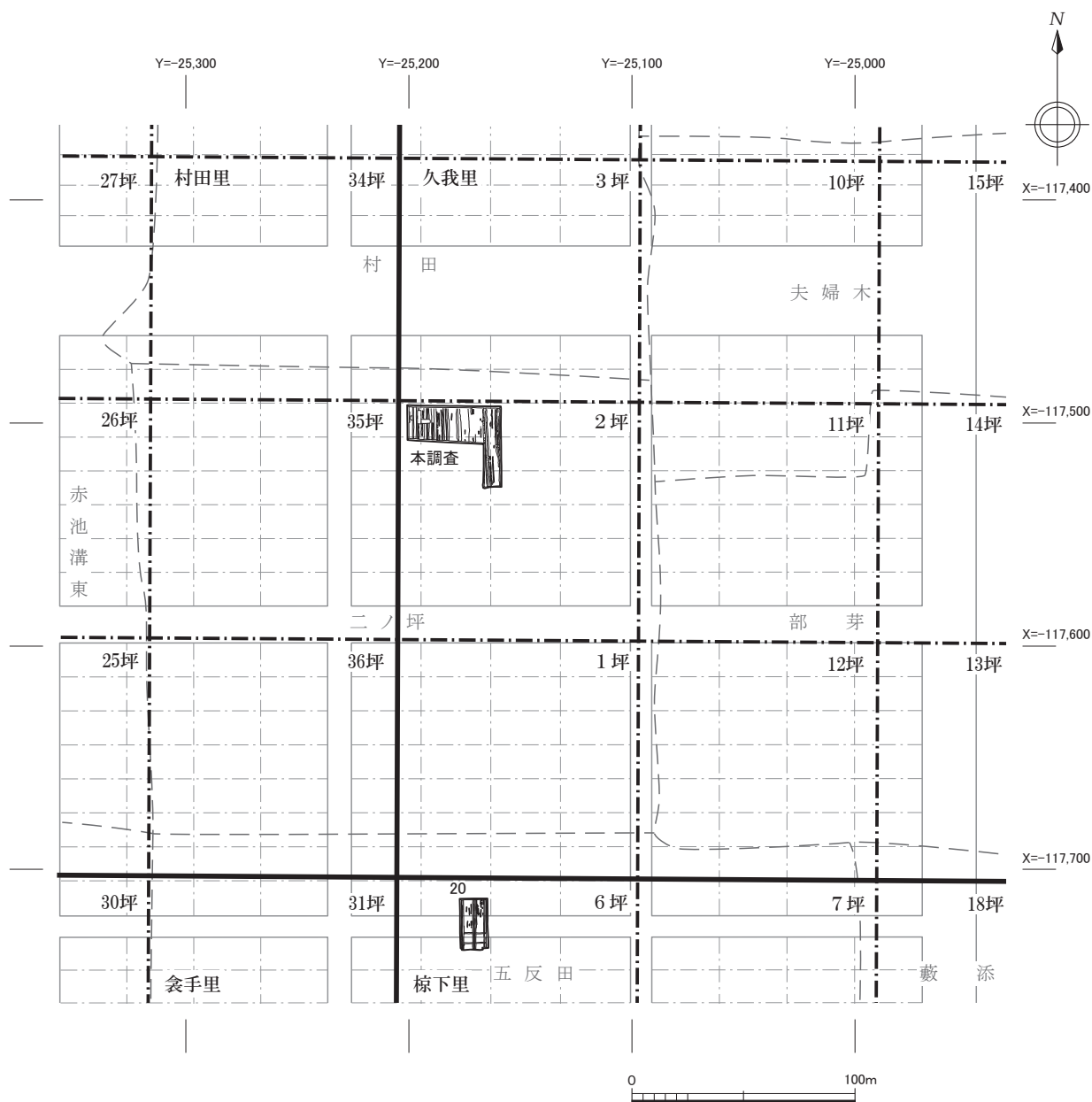


図21 久我里比定地と近世字境・長岡京条坊（1 : 3,000）

の時期まで機能していたものと考えられる。

山中氏の長岡京跡における中世小溝群の分類⁽⁴⁾に基づく、Y=-25,182以東の溝はM型溝、以西の溝はS型溝に該当すると考えられる。M型溝は桂川の氾濫原である低湿地上の遺跡にて多く認められる。いずれも約6mで等間隔に配されるが、これは条里地割一坪における一辺の長さ約109mの1/20に相当し、一坪の地割の最小単位が1/20であったことが推測される。当地で検出されたM型溝も一坪を1/20に分割した位置の上に分布することから、この地割単位が採用されていたものと想定される。山中氏はM型溝について、本来は溝という構造を目的としてつくられたものではなく、水田の畦畔をつくる際に予定地を溝状に掘削し、その土を盛り上げて畦畔に用いたものと指摘している。一方、S型溝は間隔を狭く密集するのが特徴である。藤原京などの事例から、畑作の畝形成の結果生じたものと指摘されている。

以上より、平安時代末期以降、調査地は久我家の下級荘官に給与された田地として転用され、室町時代を通じて営まれ続けたと想定される。江戸時代初頭の領地替により久我荘は解体されるものの、条里地割は小字として現代まで残り続けた。荘園開発時に掘削された溝群の配置のあり方が、現代の水田境界を境に西・東で畑・水田と用途が異なっていることから、久我荘が営まれた当時から現代に至るまで、条里地割が生かされていたことが窺える。

註

- (1) 田中 琢『平城京 古代日本を発掘する3』（岩波書店 1984年）など
- (2) 家原圭太『古代都城宅地の研究』雄山閣 2023年
- (3) 東京大学史料編纂所土地制度史研究会「山城國葛野・乙訓兩郡條里補考」（史學研究會『史林』32-2 1949年）・長宗繁一「久我殿」（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第2号 1996年）を参照した。
- (4) 山中 章「長岡京跡上層の中世小溝群について」『条里制研究』第4号 条里制研究会 1988年

表4 調査地周辺長岡京期遺構一覧表

※調査番号及参考文献は表1の掲載文献に準ずる

	調査位置 (左京を省略)	条坊関連遺構	建物	井戸	宅地区画遺構	遺構面 の標高 (m)
1	二条三坊十二・十四町、 一条条間南小路、 東三坊坊間東小路、 二条大路、東土川遺跡	二条条間南小路南北側溝 東三坊坊間東小路東西側溝 二条大路北側溝	東西棟 (二条三坊十四町) 梁間 2.1 m 桁行 1.65 m	方形縦板組隅柱横棧留型 井戸枿 (一辺) 0.9 m 深さ 1.0 m 底面標高 10.55 m	-	11.60
2	二条三坊十一町、 一条条間南小路、 鶏冠井遺跡	-	-	-	-	11.50
3	二条三坊十二町、 一条条間南小路、 鶏冠井遺跡	-	-	-	-	-
4	二条三坊十三・十四町、 一条条間南小路、 東土川遺跡	-	南北棟・東西棟 (二条三坊十三町) 梁桁 1.8 m	-	-	-
5	二条三坊十三町、二条大路、 東三坊坊間東小路	二条大路北側溝	-	-	-	11.60
6	二条四坊四町、 三条四坊一町、 東四坊坊間西小路、 二条大路	東四坊坊間西小路東側溝 二条条間南小路北側溝	-	-	-	11.2 ～ 11.4
7	二条四坊五・十二町、 東四坊坊間小路、 東四坊坊間東小路	東四坊坊間小路東側溝	-	-	-	11.1 ～ 11.45
8	二条四坊五・十二町、 東四坊坊間小路	東四坊坊間小路東西側溝	-	-	-	11.45
9	二条四坊五・十二町、 東四坊坊間小路、 東四坊坊間東小路	東四坊坊間小路東側溝	-	-	-	11.45
10	三条三坊九・十・十一・ 十四・十五町、 三条四坊三町、 三条条間北小路、 三条条間小路、 三条条間南小路、 東三坊坊間東小路、 東三坊大路、 鶏冠井清水遺跡	東三坊大路西側溝 二条条間小路南北側溝 三条条間南小路南側溝	-	-	-	11.1 ～ 12.1
11	三条三坊九町	東三坊坊間東小路西側溝	-	-	-	11.70
12	三条三坊九・十町、 東三坊坊間東小路、 三条条間北小路	東三坊坊間東小路西側溝 三条条間北小路南側溝 (交差部)	-	-	-	11.4 ～ 11.5
13	三条三坊十町、 東三坊坊間東小路、 鶏冠井清水遺跡	東三坊坊間東小路西側溝	-	-	-	11.4 ～ 11.5
14	三条三坊十一・十四町、 三条四坊三・四町、 東三坊坊間東小路、 東三坊大路、 三条条間南小路	三条条間南小路南北側溝 東三坊大路東西側溝 東三坊坊間東小路東側溝	東西棟 (三条四坊四町) 梁間 2.2 m 桁行 1.6 m	-	-	11.2 ～ 11.4
15	三条三坊十五・十六町、 三条四坊一・二町、 東三坊坊間東小路、 東三坊大路、 三条条間北小路	東三坊大路東西側溝	南北棟 (三条三坊十六町) 梁間 2.4 m 桁行 2.6 m (西底部 2.7 m) 南北棟 (三条四坊二町) 梁間 2.5 m 桁行 2.2 m	方形縦板組隅柱横棧留型 井戸枿 (一辺) 0.9 ～ 1.0 m 深さ 2.0 m 底面標高 9.2m	区画溝 (三条四坊二町) 東西方向 小径? (三条四坊二町) 東西 2 分割	11.2 ～ 11.5

	調査位置 (左京を省略)	条坊関連遺構	建物	井戸	宅地区画遺構	遺構面の 標高 (m)
16	三条三坊十六町、 東三坊坊間東小路	-	正殿 梁間 2.9 m 桁行 2.7 m 脇殿 梁桁 2.4 m	-	-	11.20
17	三条四坊六町	-	正殿 梁間 2.5 m 桁行 2.4 m 後殿 梁間 2.7 m 桁行 2.4 m 雑舎 梁桁 1.7 ~ 2.7 m	-	小径？ (南北 2 分割)	10.65
18	三条四坊六町	-	雑舎 梁桁 1.7 ~ 2.7 m	底部の土居桁のみ 井戸枿（一辺）1.35 m 底面標高 9.85 m	-	10.75
19	三条四坊八町、 二条大路、東四坊坊間小路	二条大路南側溝？	-	-	-	11.00
★	三条四坊九町（当調査）	-	建物 1（南北棟？） 梁間 1.65 m 桁行 1.8 ~ 2.7 m 建物 2 梁桁 3.6 m (間に柱穴あり？)	方形縦板組隅柱横棧留型 井戸枿（一辺）0.9 m 深さ 1.8 m 底面標高 9.3 m	-	11.15
20	三条四坊十・十一町、 三条条間小路	三条条間小路南北側溝	東西棟 (三条四坊十一町) 梁間 2.1 m 桁行 2.0 ~ 2.2 m	-	-	10.70
21	三条四坊十二町、 四条四坊九町、三条大路	三条大路南北側溝	-	-	-	11.00
22	三条四坊十三町、 四条四坊十六町、三条大路	三条大路南北側溝	東西棟 (三条四坊十三町) 梁間 2.1 m 桁行 2.0 ~ 2.2 m	方形縦板組隅柱横棧留型 井戸枿（一辺）1.0 m	-	10.20
23	三条四坊十三町、 三条条間南小路、 東四坊大路	-	-	-	-	10.50

表5 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿	東区	K3	井戸 051 枠内	9.5	2.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	灯明皿
2	土師器	椀	東区	K3	井戸 051 枠内	12.7	3.4	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
3	土師器	高杯	東区	K3	井戸 051 枠内	-	(16.1)	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
4	須恵器	杯 A	東区	K3	井戸 051 枠内	13.7	4.8	8.6	N6/ 灰色	
5	須恵器	杯 A	東区	K3	井戸 051 枠内	-	(2.0)	9.6	2.5Y5/2 暗黄褐色	
6	須恵器	壺	東区	K3	井戸 051 枠内	-	(3.1)	10.8	N6/ 灰色	
7	土製品	土馬	東区	K3	井戸 051 枠内	(長) (5.2)	(幅) (2.0)	(奥行) (5.2)	7.5YR8/4 浅黄橙色	大和型
8	瓦	丸瓦	東区	K3	井戸 051 枠内	(長) (10.6)	(幅) (9.8)	(高) (7.8)	N3/ 暗灰色	
9	木製品	曲物 底板	東区	K3	井戸 051 枠内	(径) (19.0)	-	(厚) 0.65	-	漆の付着あり
10	木製品	斎串	東区	K3	井戸 051 枠内	(長) 21.9	(幅) 3.2	(厚) 0.4	-	
11	瓦	丸瓦	東区	K3	井戸 051 掘方	(長) (6.7)	(幅) (4.9)	(高) (6.1)	10YR8/3 浅黄橙色	
12	木製品	井戸枠 横桟木	東区	K3	井戸 051 井戸枠材	(長) 100.8	(幅) 7.6	(厚) 5.1	-	
13	土師器	皿	西区	A-1 ～ 5	溝 001	10.0	1.6	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	灯明皿
14	瓦器	椀	西区	A-1 ～ 3	溝 025	13.0	(3.3)	-	N3/ 暗灰色	楠葉型
15	瓦器	椀	東区	L-1 ～ 6	溝 036	11.1	(4.2)	-	N3/ 暗灰色	楠葉型
16	瓦器	椀	東区	N-1 ～ 6	溝 047	11.4	(4.1)	-	N3/ 暗灰色	楠葉型
17	瓦質土器	鍋	東区	L-1 ～ 6	溝 036	26.0	(2.8)	-	10YR6/2 灰黄褐色	
18	須恵器	鉢	東区	J1	溝 022	-	(4.2)	-	N7/ 灰白色	東播系須恵器 (魚住窯)
19	須恵器	杯 B	西区	D-1 ～ 3	溝 011	14.9	5.0	11.9	N7/ 灰白色	
20	須恵器	壺	西区	D-1 ～ 3	溝 011	-	(5.8)	14.7	N7/ 灰白色	
21	白磁	碗	東区	N-1 ～ 6	溝 047	16.8	(2.1)	-	(胎) N9/ 白色 (釉) 2.5GY8/1 灰白色	広東省系
22	瓦質土器	羽釜	西区	B-1 ～ 3	土坑 004	-	(3.3)	-	N3/ 暗灰色	
23	瓦質土器	火鉢	西区	B-1 ～ 3	土坑 004	-	(3.7)	-	N3/ 暗灰色	
24	焼締陶器	播鉢	西区	C-4 ・ 5	中世耕作土	-	(3.5)	-	10YR5/1 褐灰色	備前
25	青磁	盤	西区	-	重機掘削	19.6	(2.7)	-	(胎) N7/ 灰白色 (釉) 10Y7/2 灰白色	龍泉窯系 鐔口盤
26	金属製品	銭	西区	-	重機掘削	(径) 2.4	-	(厚) 0.12	-	重さ 2.7g

附章 長岡京左京三条四坊九町跡出土炭化物の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、長岡京左京三条四坊九町跡の炭化物分布地点060・061より検出した炭化物に対し、放射性炭素年代測定を行い、遺跡の年代観を得る。合わせて、樹種同定を行い、当時の植生や植物利用について検討する。

1. 試料

試料は、長岡京左京三条四坊九町跡から検出した炭化物2点である。試料の詳細は、結果とともに表1・2に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化物は、形状を観察し、小さなものは全量を試料とする。炭化物からは、メス・ピンセットなどにより、根や土壌など後代の付着物を、物理的に除去する。

次に塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lであるが、試料が脆弱な場合や少ない場合は、アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ(AaAと記載)。試料がさらに少ない場合、アルカリ処理を行うと測定に必要な炭素が得られなくなるため、1 mol/Lの塩酸処理のみにとどめている(HClと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAGE 3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目

まで表した値も記す。暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.4 (Bronk, 2009) である。較正曲線はIntcal20 (Reimer et al., 2020) を用いる。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

炭化物2点のうち、炭化物分布地点060より検出された炭化物を炭化物1、炭化物分布地点061より検出された炭化物を炭化物2とする。以下結果を表1、図1に示した。試料の測定年代(補正年代)は、炭化物1が 3770 ± 20 yrBP、炭化物2が 3860 ± 20 yrBPの値を示す。

表1 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代								Code No.		
					年代値							確率 %	pal-	YU-	
1	炭化物 1 西区 E4 炭化物分布地点 060 南北セクション C-1	AaA	3770 ± 20 (3769 ± 21)	-30.93 ± 0.18	σ	calBC 2273	–	calBC 2258	4222	–	4207	calBP	10.9	15479	21673
						calBC 2205	–	calBC 2190	4154	–	4139	calBP	13.9		
						calBC 2183	–	calBC 2142	4132	–	4091	calBP	43.4		
					2σ	calBC 2286	–	calBC 2247	4235	–	4196	calBP	19.7		
						calBC 2237	–	calBC 2134	4186	–	4083	calBP	72.7		
						calBC 2081	–	calBC 2061	4030	–	4010	calBP	3.1		
2	炭化物 2 西区 G3 炭化物分布地点 060 東西セクション C-1	AaA	3860 ± 20 (3859 ± 22)	-27.61 ± 0.19	σ	calBC 2441	–	calBC 2424	4390	–	4373	calBP	6.8	15480	21674
						calBC 2405	–	calBC 2378	4354	–	4327	calBP	14.1		
						calBC 2350	–	calBC 2286	4299	–	4235	calBP	43.7		
					2σ	calBC 2247	–	calBC 2238	4196	–	4187	calBP	3.7		
						calBC 2456	–	calBC 2280	4405	–	4229	calBP	83.4		
						calBC 2252	–	calBC 2209	4201	–	4158	calBP	12.0		

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA はアルカリ濃度を薄めて処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4 を使用。
- 6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは Intcal20 を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が 68.2%、 2σ が 95.4% である。

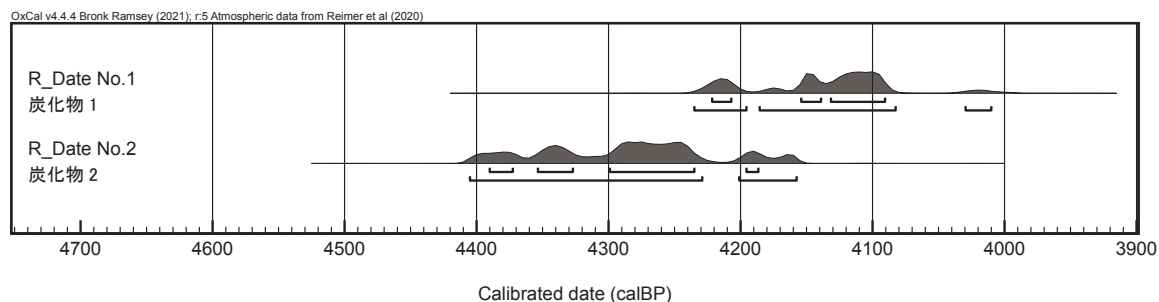


図 1 暦年較正結果

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正年代は、測定誤差を 2σ として計算させた結果、炭化物 1 が4235～4010calBP、炭化物 2 が4405～4158calBPである。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表 1 に示す。検出された樹種は、アカガシ亜属であった。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

表 2 樹種同定結果

・コナラ属アカガシ亜属
(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)
ブナ科

No.	地点等	樹種
炭化物 1	西区 E4 炭化物分布地点 060 南北セクション C-1	アカガシ亜属
炭化物 2	西区 G3 炭化物分布地点 060 東西セクション C-1	アカガシ亜属

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－15細胞高のものと複合放射組織とがある。

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果、炭化物 1・2 はどちらも、縄文時代後期頃の試料であることが窺える。

樹種同定の結果、炭化物 1・2 はどちらもアカガシ亜属であった。アカガシ亜属は、温帯林に生息し、山中に見られる樹種である。材はとても重硬で、強靱な材であり、水湿に強い。優良材として、器具材や家具材、建築材、薪炭材など、広く利用される。吉田本町遺跡（伊東隆夫, 1992）などの県内の遺跡で、アカガシ亜属の炭化材としての出土が確認できる。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.

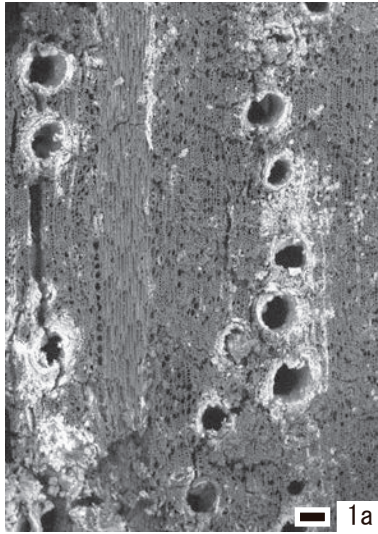
林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

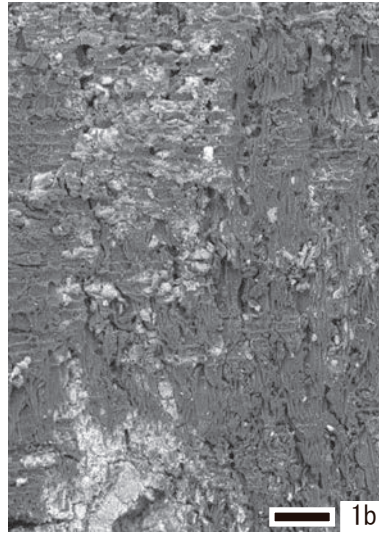
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫,1992, 京都大学本部構内AW27区の発掘調査 京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度, 京都大学埋蔵文化財センター,28-29
- 伊東隆夫・山田昌久（編）,2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）,海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

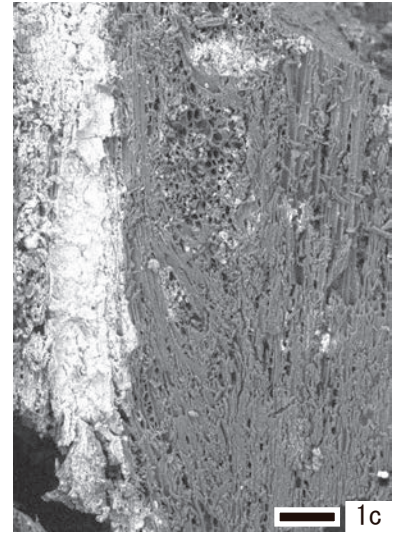
図版 1 炭化材



1a



1b



1c

1 アカガシ亜属（炭化物 1）

a: 木口 b: 柁目 c: 板目
スケールは 100 μ m

図 版



1. 遺構完掘後 調査区全景 垂直写真（上が北）



2. 調査地遠景（調査地上空より北東方 西山連峰を臨む）



1. 西区 中世遺構完掘後（南から）



2. 西区 中世遺構完掘後 垂直写真（上が北）



1. 東区 中世遺構完掘後（北から）



2. 東区 中世遺構完掘後 垂直写真（上が東）



1. 西区 土坑004・005 完掘状況（北から）



2. 西区 土坑004 東西断面（北から）



3. 西区 土坑005 南北断面（東から）



1. 東区 土坑052 検出状況（北から）



2. 東区 土坑052 東西断面（北から）



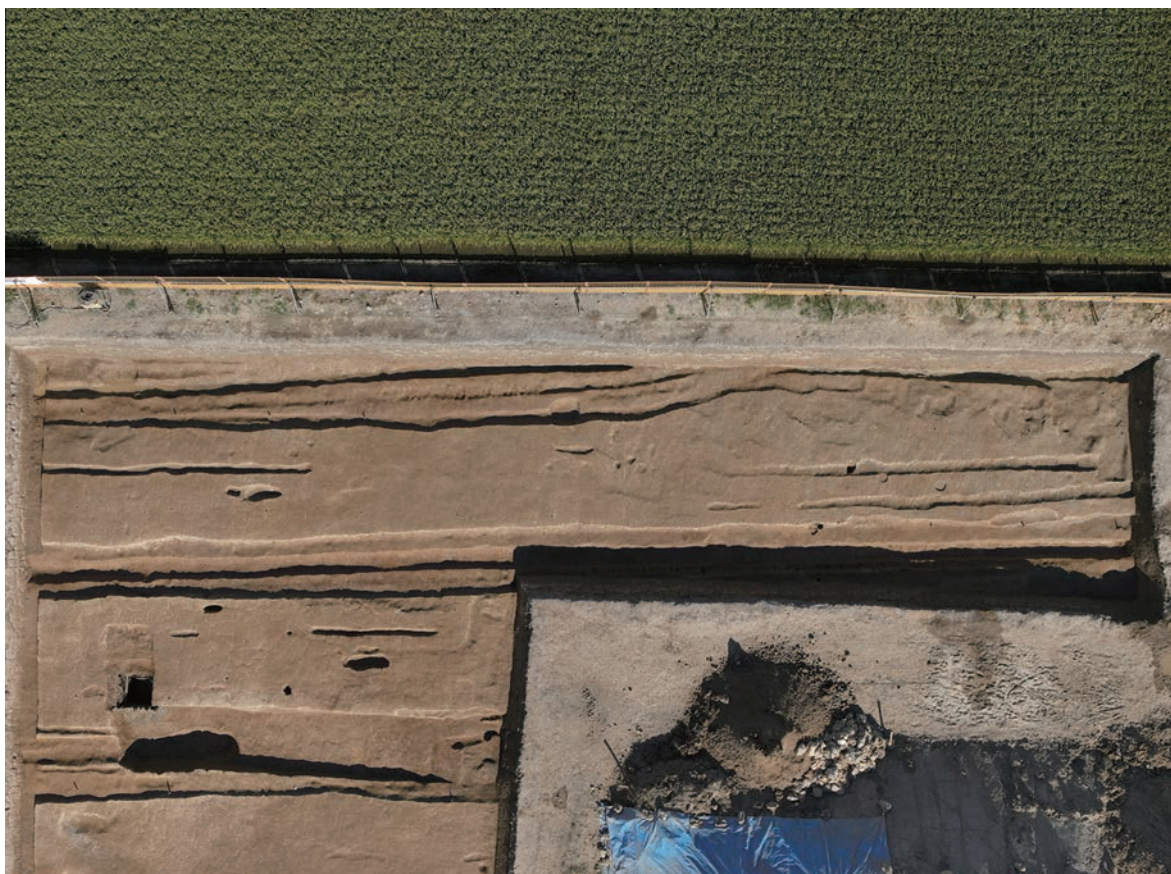
1. 西区 長岡京期遺構完掘後（南から）



2. 西区 長岡京期遺構完掘後 垂直写真（上が北）



1. 東区 長岡京期遺構完掘後（北から）



2. 東区 長岡京期遺構完掘後 垂直写真（上が東）



1. 西区 建物1 柱穴検出状況 垂直写真（上が北）



2. 西区 柱穴028 東西断面（北から）



3. 西区 柱穴029 東西断面（北から）



4. 西区 柱穴032 東西断面（北から）



1. 西区 建物2 柱穴検出状況 垂直写真（上が北）



2. 西区 柱穴030 南北断面（西から）



3. 西区 柱穴031 東西断面（南から）



4. 西区 柱穴033 東西断面（南から）



5. 西区 柱穴035 東西断面（南から）



1. 東区 井戸051 井戸枠内掘削後（北から）



2. 東区 井戸051 西半 井戸掘方断割後（西から）



1. 井戸051 出土遺物 1 (土器)



2. 井戸051 出土遺物 2 (土器・土製品・瓦)



1. 素掘り溝群 出土遺物



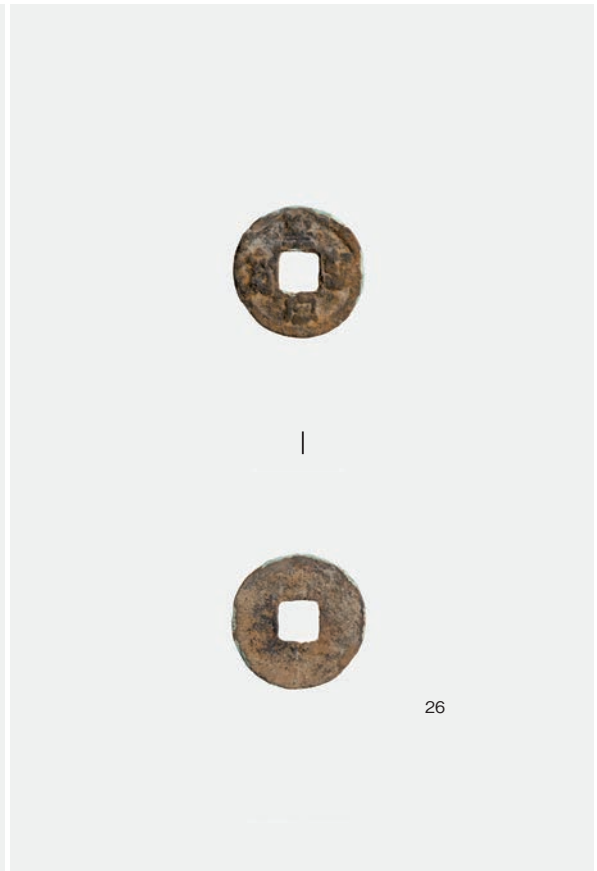
2. 土坑004、重機掘削、中世耕作土 出土遺物



1. 井戸051 出土遺物 3 (斎串)



2. 井戸051 出土遺物 4 (曲物底板)



3. 重機掘削 出土遺物 2 (錢貨)

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょうさんじょうしほうきゅうちょうあとはつくつちょうさほう こくしょ							
書名	長岡京左京三条四坊九町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	望月麻佑 興梠千春							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町8番地							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2025年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうさきょうさんじょう 長岡京左京三条 しほうきゅうちょうあ 四坊九町跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 こがにしでちょう 久我西出町 7ばん4・5・6・ 7 7	26100	3	34度 56分 25.6秒	135度 43分 27.6秒	2024年 6月4日 ～ 2024年 9月27日	852.5 m ²	物流 倉庫 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
長岡京左京三条 四坊九町跡	都城	長岡京期		建物 井戸		土師器 須恵器 土製品 瓦 木製品	調査地は長岡京左京三条四坊九町の宅地内に位置する。長岡京期の遺構としては、掘立柱建物2棟と縦板組隅柱横棧留型の井戸1基を検出した。長岡京廃都後、中世より久我荘として水田開発が行われた。条里地割遺構として、平安時代末期から鎌倉時代後半の南北素掘り溝を多数検出している。	
		平安時代末期 ～ 室町時代		素掘り溝 土坑		土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器 焼締陶器 磁器 金属製品		

文化財サービス発掘調査報告書 第34集

長岡京左京三条四坊九町跡 発掘調査報告書

発行日 2025年3月31日

株式会社 文化財サービス

編集 〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町8番地
TEL 075-672-6800

三星商事印刷株式会社

印刷 〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
TEL 075-467-5151